

# 郷 桜 井 堀 遺 跡

—一般県道桜井山路線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 1—

2006.9

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター

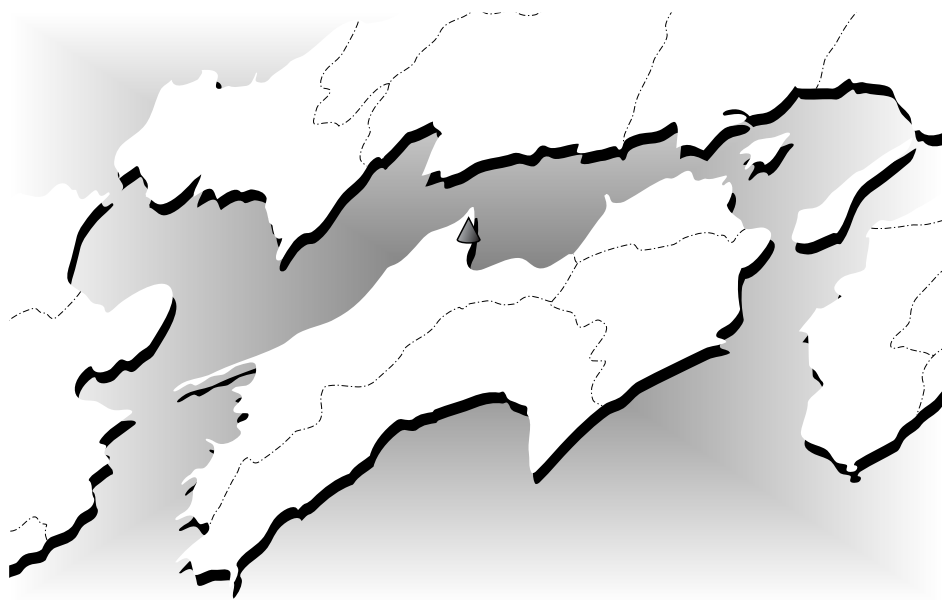






# 郷 桜 井 堀 遺 跡

— 一般県道桜井山路線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 1 —



2006.9

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター



## 序 文

近年、全国各地で開発等に伴う埋蔵文化財の発掘調査が数多く実施され、関心も高まってきました。

このたび、一般県道桜井山路線道路改良工事に先立ち、愛媛県の委託を受けて財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが平成15年7月から同年8月にかけて、愛媛県今治市郷桜井1丁目の同予定地で実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書を刊行することとなりました。

今回の調査では、中世の遺構・遺物を検出し、当地域の歴史を解明するうえで貴重な資料になるものと思われまます。

本報告書が地域の歴史や考古学研究の資料として、多くの方々に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、調査に際しまして、温かいご理解とご協力をいただきました愛媛県今治地方局をはじめ、ご指導をいただいた関係機関の皆様ならびに地元の方々に厚くお礼申し上げます。

平成18年9月

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター

理事長 野本 俊二





## 例 言

- 1 本報告書は、愛媛県今治市郷桜井1丁目に所在する郷桜井堀遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および報告書の作成は、一般県道桜井山路線の道路改良工事に伴い、愛媛県の委託を受け、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 発掘調査は、平成15年7月から平成15年8月の間に実施し、整理作業は、同月から平成15年11月にかけて実施し、平成18年9月に報告書作成を行った。
- 4 発掘調査および整理・報告書の作成は、次の職員が担当した。  
三好 一史 鎌土 奈々 西川 真美 福山 裕章
- 5 発掘調査および報告書作成において、下記の職員および作業員の協力を得た。  
**職 員**  
中野 良一 多田 仁  
**現場作業員(50音順)**  
相原 新治 市川 慶一郎 井手 修 曾我部 忠昭 長井 正直  
檜垣 美鶴 村上 俊一 山本 透  
**整理作業員(50音順)**  
越智 美代子 是澤 真喜枝 竹田 富士子 西村 義子 明賀 真知子
- 6 本報告書の執筆・編集は三好・鎌土・西川が分担して行った。

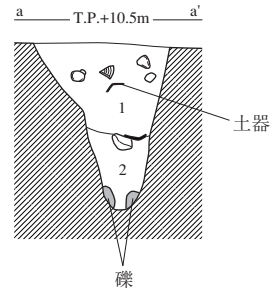
# 凡 例

## 遺構の略号

遺構種別	略号
土 坑	SK...
柱 穴・小穴	SP...
自 然 流 路	SR...

## 遺物一覧の略記号

略記号	内 容
L	長 さ
W	幅
H	器 高 ・ 高 さ
T	厚 直 径
R	直 径
MR	長 径
TR	口 径
NR	頸 部 径
LR	底 径
g	重 さ
o	外 面
i	内 面
(...cm)	推 定 値
[...cm]	残 存 値

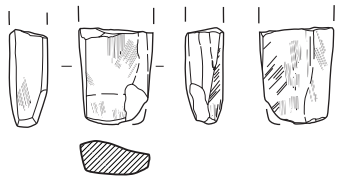


土層断面図中の網伏せは磔の断面、塗りつぶしは土器の断面を示す。

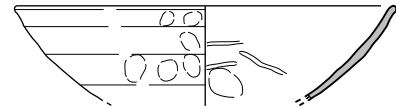
## 遺物の表現例

### 断面表記

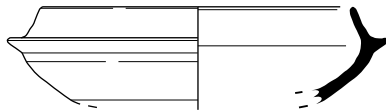
石器・石製品



瓦器・瓦質土器



須恵器・須恵質土器



1 中世土器においては、杯・皿類を土師器、それ以外を土師質土器として分類した。

2 土色・土器の色調については、『新版 標準土色帖(2002年版)』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色標監修)に拠った。

# 本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過 .....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
1 確認調査.....	1
2 調査の経過.....	1
3 調査体制.....	2
第2章 遺跡をとりまく環境 .....	3
第1節 地理的環境.....	3
1 今治平野.....	3
2 郷桜井.....	3
第2節 歴史的環境.....	3
1 旧石器時代.....	3
2 縄文時代.....	3
3 弥生時代.....	5
4 古墳時代.....	5
5 古代.....	5
6 中世.....	6
第3章 調査の概要 .....	9
第1節 地形と調査区.....	9
第2節 基本層序.....	9
第3節 遺構と遺物の概要.....	9
第4章 中世の遺構と遺物.....	15
第1節 第2面の遺構と遺物.....	15
1 土坑 .....	15
2 自然流路 .....	15
3 柱穴出土遺物 .....	19
4 包含層出土遺物 .....	19
第2節 第1面の遺構と遺物.....	21
1 土坑 .....	21
2 柱穴出土遺物 .....	27

3 包含層出土遺物 .....	27
第3節 その他の遺物 .....	27
第5章 まとめ .....	33

## 目 次

図1 調査区の位置と周辺遺跡.....	4
図2 調査区の位置.....	8
図3 遺構配置・基本層序 .....	11
図4 中世(第2面)遺構配置 .....	16
図5 遺構と遺物1(土坑1) .....	17
図6 遺構と遺物2(自然流路) .....	18
図7 柱穴出土遺物1.....	19
図8 V層出土遺物 .....	19
図9 中世(第1面)遺構配置 .....	20
図10 遺構と遺物3(土坑2) .....	23
図11 遺構と遺物4(土坑3) .....	24
図12 遺構と遺物5(土坑4) .....	25
図13 遺構と遺物6(土坑5) .....	26
図14 柱穴出土遺物2 .....	27
図15 IV層出土および層位不明遺物 .....	28

## 表 目 次

表1 調査体制.....	2
表2 主要遺構一覧 .....	10
表3 柱穴一覧(1) .....	13
表4 柱穴一覧(2) .....	14
表5 掲載遺物一覧 .....	29
表6 出土遺物一覧(1) .....	30
表7 出土遺物一覧(2) .....	30

表8 出土遺物一覧(3) .....31

## 図 版 目 次

図版1 調査前の遺跡近景(南西より)／調査前の遺跡近景(南西より)  
南壁土層堆積状況(北より)／基本層序(北より)

図版2 SK15(半截)／SK16(半截)／SK17(半截)／SR01

図版3 中世第2面完掘状況(北東より)／SK02(半截)／SK03／SK04

図版4 SK05／SK07／SK08(半截)／SK11

図版5 SK12／SK13(半截)／SK14(半截)／中世第1面完掘状況(北東より)

図版6 出土遺物1(2～4,6,8～11,14～24,26,27,30,31,35,37)

図版7 出土遺物2(36)



# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

### 1 確認調査

愛媛県今治地方局(以下「地方局」)は、一般県道桜井山路線の改良工事に伴い、当路線が古代の官道である「南海道」に比定され、また、今治市郷桜井1丁目の同予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である「桜井小中学校遺跡」に近接していることから、愛媛県教育委員会(以下「県教委」)とその取り扱いについて協議を行った。そこで県教委は、埋蔵文化財の有無等について、平成14年12月に試掘調査を実施した。その結果、同予定地内の170m<sup>2</sup>の範囲で古代から中世にかけての遺跡の存在が確認された。

### 2 調査の経過

試掘調査の結果により、工事に先立って記録保存のための発掘調査が必要となったことから、地方局と県教委及び財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター(以下「県埋文センター」)が協議を行い、平成15年5月に愛媛県の委託を受けて県埋文センターが発掘調査を実施することになった。

今回の調査区の遺跡名については、今治市教育委員会及び県教委と協議を行い、郷桜井掘遺跡とすることとした。

発掘調査は、平成15年5月から調査準備を行い同年7月14日に着手した。県教委の試掘調査結果を参考に、まず調査区の周囲に人力でトレンチを掘削して土層の堆積状況を確認した。その後、機械力を用いて表土層を除去し、遺構・遺物の検出を行った。それと並行して順次、平・断面図の測量及び写真撮影などの観察・記録を実施し、これらの作業を基盤面まで繰り返した。

また、測量については、基準点(WGS84系測地成果2000)を調査区周辺に打設してこれを用いた。なお、遺物の取り上げについては、層位・遺構ごとに行い、必要に応じて出土状況図を作成した。

現地における発掘調査は、8月8日に終了した。その後11月30日までの間、遺物の接合・復元作業、遺構図の作成、遺物の実測・トレース等の基礎作業を行い、平成18年9月に報告書にまとめた。

発掘調査で得られた資料については、遺構・遺物の図面や写真類を県埋文センターが、出土遺物を県教委がそれぞれ保管・管理している。なお、遺構写真はデジタル化(photoCD)して原盤とともに保存している。

### 3 調査体制(表1)

発掘調査および報告書作成の調査体制は、表1のとおりである。

表1 調査体制

平成15年度		平成18年度	
理事長	野本俊二	理事長	野本俊二
常務理事	天野全二	常務理事	日野孝雄
総務課長	真山勉	総務課長	越智英規
調査課長	沖野新一	調査課長	岡田敏彦
調査第三係長	高橋勸次	調査第二係長	眞鍋昭文
派遣調査員	三好一史	主任調査員	西川真美
嘱託員	鎌土奈々	派遣調査員	福山裕章



## 第2章 遺跡をとりまく環境

### 第1節 地理的環境

#### 1 今治平野

今治市は、高縄半島の北東部に位置している。平成の市町村合併以前の旧今治市は今治平野を市域として、周囲を越智郡波方町・大西町・玉川町・朝倉村に接していたが、現在これらの町村は今治市に合併している。今治平野の東は燧灘に面し、来島海峡を挟んで芸予諸島・中国地方と対しており、古来より海上交通の要衝として知られていた。市の中央部である今治平野は、浅川・蒼社川・頓田川の主要三河川によって形成された沖積平野である。海岸部から1～2kmの範囲は、海岸砂堆列を含む三角州性の低地で、その内陸部は扇状地性の氾濫原である。地質学的には領家花崗岩帯に属し、表層は灰色土壌もしくは花崗岩の風化土に覆われる。地下水位が極めて高く、湧水が著しい。

#### 2 郷桜井

郷桜井は、今治平野南端に位置し、北に唐子台の独立丘陵、南西に霊仙山・笠松山の山塊、南東は今治市向山から南へ延びる小起伏地に囲まれた東西に細長い沖積平野に位置する。この沖積平野は頓田川及びその支流の大川によって形成されたものである。地名が示すように、古代桜井郷の地域に含まれ、海岸線沿いの集落を浜桜井、山麓の集落を郷桜井という。また、桜井小中学校の敷地内は、周知の埋蔵文化財包蔵地「桜井小中学校遺跡」として知られ、「国分尼寺跡」と推定する説もある。

### 第2節 歴史的環境(図1)

#### 1 旧石器時代

今治市内では、島嶼部および内陸の玉川町・朝倉村で、ナイフ形石器や有舌尖頭器の出土が知られている。また近年、高橋佐夜ノ谷遺跡の自然流路から角錐状石器が発見され、平野部での旧石器時代遺物の初例として注目されている。

#### 2 縄文時代

縄文時代の遺跡の初現は、早期の叶浦B遺跡であるが、瀬戸内海沿岸に広範に遺跡が展開するのは縄文時代後期になってからである。糸大谷遺跡や江口貝塚を代表とする臨海集落を始めとして、桜井沖浦海岸にある沖浦遺跡(1)や朝倉村山口遺跡(2)などがその代表的なものである。特に山口遺跡では、縄文時代早期から晩期にかけての土器や姫島産黒曜石製の石鏃が出土している。また、晩期には、今治平野中央部の中寺州尾遺跡(3)で、不安定な出土状況ながら多数の土器の出土が報告されている。



図1 調査区の位置と周辺遺跡

### 3 弥生時代

中寺州尾遺跡や阿方遺跡では、前期前半に遡る遠賀川系土器が出土している。前期末から中期初頭にかけては、古くより知られていた阿方遺跡(貝塚)や片山貝塚のほか、近年では宮ヶ崎山形遺跡で良好な資料が出土している。

中期では、標識土器である「中寺式土器」が出土した中寺遺跡(4)が著名である。前半は、前期末から継続して営まれていた姫坂遺跡(5)や山路下平遺跡など、丘陵先端部に集落が展開されていたが、後半になるとそれらの集落は衰退し、阿方頭王遺跡群や阿方中屋遺跡など丘陵部や山頂に営まれる丘陵性の集落が顕著になってくる。

後期前半の集落は、引き続き丘陵部に立地するが、後半になると再び丘陵裾部や平野に展開されるようになる。犬塚遺跡や、これに近接する四村日本遺跡(6)などが代表的な遺跡として挙げられる。終末期になると、頓田川流域に宮ノ内遺跡(7)や松木遺跡(8)などの拠点集落が営まれ、唐子台墳墓群(9)はこうした集落と密接に関連する墳墓と考えられる。

今治平野においては各時期とも、主要河川である矢田川・蒼社川・頓田川それぞれの流域ごとに主要な集落が展開し、互いに有機的な関連をもちつつ消長を繰り返していたものと考えられる。

### 4 古墳時代

前期では前方後円墳である国分1号墳(11)、前方後方墳の雉之尾1号墳(12)、県下最大の前方後円墳である相の谷1号墳などが著名である。なかでも国分1号墳と雉之尾1号墳は、ともに弥生時代終末の墳墓群も営まれている唐子台墳墓群内にあり、県内最古の発生期の古墳の様相を知る貴重な資料である。

中期では、久保山前方後円墳(13)、朝倉村の樹之本古墳(14)・根上がり松古墳(15)などが知られている。今治平野南端の旦・長沢古墳群(16)は、主として後期古墳が多く点在しているが、二の谷2号墳(17)では、古墳時代中期と推測される成人男性の人骨が確認されている。

後期では、今治平野北部の片山古墳群、平野南端の旦・長沢古墳群・菜切谷古墳群(18)などの群集墳がある。また、朝倉村の野々瀬古墳群(19)は、県下最大の群集墳である。

弥生時代終末から古墳時代前期にかけての集落は、近年、平野部各所で確認されている。特に頓田川流域に顕著で、松木広田遺跡(20)は、大規模集落と考えられる。中期の集落では高橋湯ノ窪遺跡3次調査で竪穴住居が確認されている。後期の集落では、鉄滓が数点出土した阿方中屋遺跡や多量の土器を出土した溝が検出された高橋湯ノ窪遺跡がある。

### 5 古代

古代の今治平野周辺は越智郡と呼ばれ、奈良時代には国府や国分寺・国分尼寺が設置され、伊予国における政治・経済・文化の中心として栄えた。

伊予国府は、文献等により今治市域に置かれていたことに異論はないが、その推定地については諸説[古国分(21)・八町(22)・中寺(23)・町谷(24)・出作(25)・上徳(26)]あり、いまだ発掘調査では確認されていない。



伊予国分寺は文献史料から天平勝宝8年(756)12月には完成していたと考えられる。現在、伊予国分寺跡(27)には、塔の基壇や礎石が残存し、国指定の史跡となっている。これらの遺跡や数度の発掘調査により、ほぼ南北に中軸線をとる伽藍配置を推測することができるが、細部はもとより寺域についても、いまだ不明瞭である。東および北を唐子山とその丘陵に囲まれ、西は南海道に面する高台にあり、国分寺創建の勅にいう「好処」にふさわしい場所である。

伊予国分尼寺跡(28)は、現在の桜井小中学校敷地内と考えられている。元々この場所には、現在南西の引地山麓に位置する法華寺が建っており、寺伝によると寛永12年(1635)に移転したとある。文献等からは、法華寺の前身が伊予国分尼寺である可能性が高い。法華寺移転後は農地として利用されていたが、明治33年に桜井高等小学校がこの地に建設されて以来、校舎の増改築・校地の拡張を繰り返して現在に至っている。この増改築等の際に、多くの瓦や礎石と思われる巨石が出土したという話が伝わっているが、記録はほとんど残っておらず、わずかに奈良時代から平安時代初頭にかけての瓦片が小中学校に所蔵されているのみである。発掘調査は、昭和55年から62年にかけて、校舎の増改築に伴う緊急調査として4度実施されている。昭和61年の発掘調査では、礎石や基壇は確認できなかったものの、調査区中央で東西・南北方向に延びる溝状遺構や土坑、および包含層中から多数の瓦が出土している。また、翌62年の柔剣道場建設の際の発掘調査では、約50cm幅で南北へ延びる帯状の瓦列が検出されている。ともに寺域を区画する遺構の可能性はあるものの、攪乱が多い上調査範囲も限られたもので、寺域や伽藍配置について言及できる資料とは言えない。一方、桜井小学校から南へ約400mほど離れた水田に塔の礎石と考えられるものが、県史跡伊予国分尼寺塔跡(29)として残っており、かつては、この場所が伊予国分尼寺跡と推定されていたが、現在では地形的な理由や出土遺物等から、伊予国分尼寺とは別の寺院跡の可能性が指摘されている。

これらの寺院の屋根を葺く瓦を生産した窯として、鳥越池窯跡(30)や須賀神社窯跡(31)が挙げられる。また、須賀神社窯跡に隣接する宮之前遺跡(32)は、同窯跡で製作された瓦や須恵器の一時的な保管場所であると考えられている。

条里地割に沿って直線に通る太政官道である南海道は、地形図や国分寺・国分尼寺の推定地から判断して、現在の県道桜井山路線に比定できるものの、考古学的な検証はできていない。

## 6 中世

郷桜井八反地遺跡(33)は、八町遺跡(34)や伊予国分尼寺跡と同様の軒平瓦や輸入陶器・緑釉陶器・銭貨などが出土した、鎌倉時代から室町時代初期にかけての集落遺跡である。また、登畑遺跡(35)では、集落跡や鑄造関連の遺物が、且遺跡(36)では、掘立柱建物や県内初出の瓦組井戸が検出されている。

### 参考文献

愛媛県史編さん委員会 1986『愛媛県史資料編考古』

愛媛県史編さん委員会 1984『愛媛県史古代Ⅱ・中世』

愛媛県史編さん委員会 1985『愛媛県史学問・宗教』  
作田一耕ほか 1987『伊予国分尼寺跡』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター  
大瀧雅嗣 1989『一般国道196号今治道路II』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター  
谷若倫郎 1996『糸大谷遺跡』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター  
窪田賢治 1998『登畑遺跡』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター  
谷若倫郎 1998『四村日本遺跡』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター  
眞鍋昭文ほか 2000『阿方遺跡・矢田八反坪遺跡』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター  
三好裕之ほか 2000『旦遺跡』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター  
芝田幸光ほか 1981『富田小学校・桜井小学校屋内運動場』今治市教育委員会  
芝田幸光ほか 1983『桜井小学校プール』今治市教育委員会  
八木武弘 1988『桜井中学校遺跡発掘調査報告書』今治市教育委員会  
田坂嘉則ほか 1994『郷桜井八反地遺跡』今治市教育委員会  
小野倫良 1997『阿方中屋遺跡発掘調査報告書』今治市教育委員会  
白石聡 1997『新谷畦田遺跡発掘調査報告書』今治市教育委員会  
田坂嘉則ほか 1999『伊予国分尼寺遺跡』今治市教育委員会  
藤村啓修 2001『伊予国分寺確認調査』今治市教育委員会  
白石聡 2002『松木広田遺跡(松木遺跡群)I』今治市教育委員会  
石田茂作監修 1984『新版 仏教考古学講座 第二巻 寺院』雄山閣  
吉川弘文館 1987『新修 国分寺の研究 第五巻上 南海道  
同朋舎出版 1991『図説 日本の史跡5 古代2』  
狩野久編 1999『古代を考える 古代寺院』吉川弘文館  
木下良編 1999『古代を考える 古代道路』吉川弘文館  
森郁夫 2001『瓦』法政大学出版局  
桜井小学校百年史編纂会 1978『桜井小学校百年史』

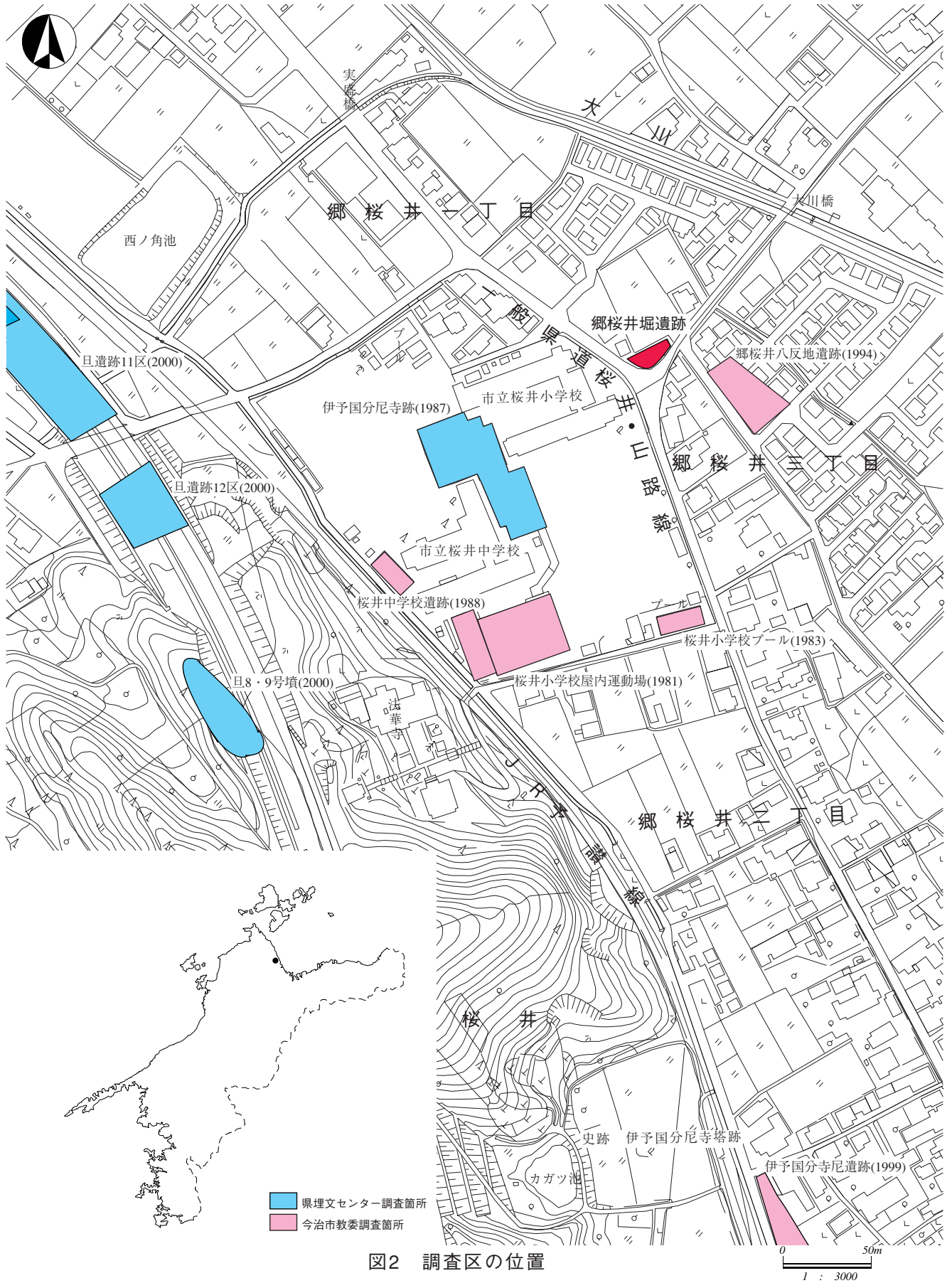


図2 調査区の位置

## 第3章 調査の概要

### 第1節 地形と調査区(図2)

郷桜井堀遺跡の絶対位置は、北緯34度00分52秒、東経133度02分14秒の交差する付近である。行政上は、今治市郷桜井1丁目6-11、6-12で、調査前は宅地である。調査区は、県道桜井山路線と市道が交差する三叉路の北側に位置し、引地山から延びる丘陵の裾部と沖積低地の接する地点にあたる。調査区は北東－南西方向に長辺をとる不整形な四角形で、現地表面の標高は約3.2mである。

### 第2節 基本層序(図3)

層序は全ての壁面で観察し、西壁・南壁の土層堆積図を作成した。

基本層序は6層に分層した。I層は造成土及び攪乱・建物基礎等である。調査区には、以前に店舗兼用の住宅が2軒建っており、造成土はこれに由来する。また、堅固な基礎が入り、深いところは、IV層上面近くまで達していた。

II層は水田耕作土層、III層はその床土層である。調査区南壁にII層上面で石列が検出されたが、これは旧市道と民地との境界と考えられる。

IV層は灰色を呈する細礫混じり粘土層で調査区全面に安定して堆積し、中世の遺物包含層である。このIV層下面が第1遺構面(13世紀頃)である。

V層は調査区北東部に分布するオリーブ黒色の粘土混じり砂層である。窯壁や炭化物が多量に混じる中世の遺物包含層で、V層下面が第2遺構面であるが、出土遺物から第1遺構面との時期差はほとんどないものと思われる。

VI層はオリーブ黄色を呈する砂層で、頓田川・大川などの河川堆積物と考えられる。

### 第3節 遺構と遺物の概要

検出した遺構は土坑17基、自然流路1条、柱穴84である。主要遺構については表2に一覧し、第4章で詳述する。柱穴は表3に一覧するとともに特徴的な遺物が出土したものについては、同様に第4章で詳述する。

出土遺物は中世の土器が大半を占めている。出土点数は1,969点で、そのうち資料化したものは、須恵器5点・黒色土器1点・土師器7点・瓦器11点・瓦質土器1点・陶磁器2点・瓦7点・石器1点・石製品1点・銅製品1点である。未掲載遺物については、種別・出土情報・数量等を第4章末の出土遺物一覧表(表5～8)に記載した。また、出土遺物はA～Cの3区分に分類し、各区分は下記の分類基準に依った。

表2 主要遺構一覧

単位:cm (※):復元値 [※]:残存値 →※※※を切る,←※※※に切られる

種別	遺構名	平面形	長さ	幅	深さ	重複関係	掲載遺物	図	図版
土坑	SK01	楕円	172.0	125.0	23.0			10	
	SK02	隅丸方	90.0	90.0	15.0	→SP30		10	3
	SK03	隅丸長方	[80.0]	[83.0]	13.0	←SP29		10	3
	SK04	楕円	[105.0]	98.5	7.0		20,21	10	3
	SK05	長楕円	136.0	[104.0]	16.0		22	11	4
	SK06	楕円	131.0	94.0	11.0			11	
	SK07	長楕円	268.0	86.0	13.0	→SP43,44	23	11	4
	SK08	楕円	88.0	78.0	10.0			11	4
	SK09	隅丸長方	111.0	96.0	14.0			12	
	SK10	隅丸長方	111.0	109.0	19.0			12	
	SK11	不整	430.0	[75.0]	13.5		24	12	4
	SK12	隅丸長方	[100.0]	[67.0]	12.0			12	5
	SK13	長楕円	120.0	65.0	9.0			13	5
	SK14	不整	[155.0]	[31.0]	15.0		25	13	5
	SK15	楕円	130.0	72.0	13.0			5	2
	SK16	楕円	62.0	[50.0]	12.5		1,2	5	2
	SK17	楕円	100.0	64.0	5.0			5	2
自然流路	SR01	带状	[650.0]	[66.0]	[36.0]	←SP75	3~11	6	2

A … 報告書掲載遺物。

B … 報告書掲載分を除く遺物で、

1 遺構出土及び出土層位の明確な土器類で、器種及び部位の判別可能な個体（口縁部・底部など）。

2 土製品・剥片類を除く石器など。

C … A・B区分を除く遺物。



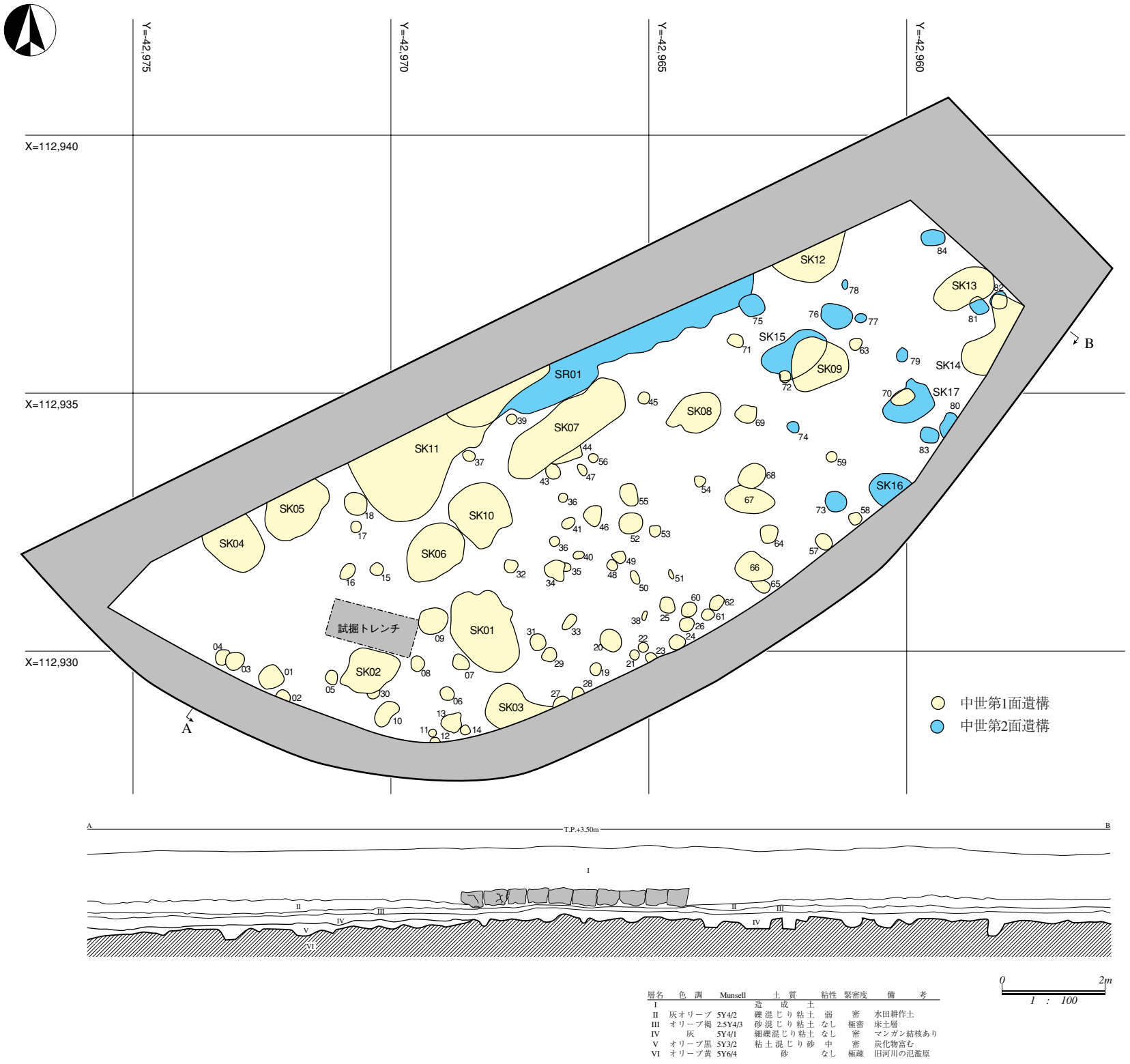


図3 遺構配置・基本層序



表3 柱穴一覧(1)

単位:cm (\*):復元値 [\*]:残存値 →\*\*\*を切る,←\*\*\*に切られる

遺構名	平面形	検出面埋土色調	長径	短径	深さ	重複関係	備考	図	図版
SP01	楕円	灰(7.5Y4/1)	43.0	40.0	8.0		土師器片を含む	9	
SP02	楕円	灰(7.5Y4/1)	[30.0]	24.0	20.0		瓦器・瓦片を含む	9	
SP03	円	灰(7.5Y4/1)	30.0	28.0	12.0	←SP04		9	
SP04	円	灰(7.5Y4/1)	24.0	22.0	10.0	→SP03		9	
SP05	円	灰(7.5Y4/1)	20.0	18.0	20.0			9	
SP06	円	灰(7.5Y4/1)	22.0	20.0	8.0			9	
SP07	楕円	灰(7.5Y4/1)	34.0	30.0	13.0		須恵器片を含む	9	
SP08	円	灰(7.5Y4/1)	28.0	28.0	7.0		須恵器・土師器片を含む	9	
SP09	楕円	灰(7.5Y4/1)	50.0	36.0	10.0		土師器片を含む	9	
SP10	円	灰(7.5Y4/1)	46.0	26.0	12.0				
SP11	円	灰(7.5Y4/1)	16.0	16.0	9.0			9	
SP12	円	灰(7.5Y4/1)	[14.0]	20.0	5.0			9	
SP13	円	灰(7.5Y4/1)	30.0	30.0	13.0		土師器片・石器を含む	9	
SP14	円	灰(7.5Y4/1)	18.0	18.0	8.0			9	
SP15	円	灰(7.5Y4/1)	22.0	22.0	6.0			9	
SP16	楕円	灰(7.5Y4/1)	30.0	22.0	12.0			9	
SP17	円	灰(7.5Y4/1)	20.0	20.0	14.0			9	
SP18	円	灰(7.5Y4/1)	33.0	33.0	14.0		土師器・瓦片を含む	9	
SP19	円	灰(7.5Y4/1)	23.0	20.0	10.0			9	
SP20	楕円	灰(7.5Y4/1)	44.0	40.0	15.0			9	
SP21	円	灰(7.5Y4/1)	17.0	17.0	9.0			9	
SP22	円	灰(7.5Y4/1)	15.0	15.0	10.0			9	
SP23	円	灰(7.5Y4/1)	18.0	18.0	10.0		瓦器片を含む	9	
SP24	円	灰(7.5Y4/1)	26.0	26.0	12.0		須恵器片を含む	9	
SP25	楕円	灰(7.5Y4/1)	28.0	25.0	16.0			9	
SP26	円	灰(7.5Y4/1)	24.0	24.0	16.0			9	
SP27	円	灰(7.5Y4/1)	30.0	[16.0]	10.0	→SK03		9	
SP28	円	灰(7.5Y4/1)	30.0	[15.0]	10.0			9	
SP29	楕円	灰(7.5Y4/1)	23.0	20.0	12.0			9	
SP30	円	灰(7.5Y4/1)	20.0	20.0	25.0	←SK02		9	
SP31	円	灰(7.5Y4/1)	30.0	27.0	14.0		弥生土器・土師器片を含む	9	
SP32	円	灰(7.5Y4/1)	26.0	20.0	9.0		瓦器片を含む	9	
SP33	楕円	灰(7.5Y4/1)	27.0	14.0	5.0			9	
SP34	不整円	灰(7.5Y4/1)	37.0	31.0	9.0	→SP35	土師器片を含む	9	
SP35	円	灰(7.5Y4/1)	14.0	11.0	12.0	←SP34		9	
SP36	円	灰(7.5Y4/1)	16.0	16.0	4.0			9	
SP37	円	灰(7.5Y4/1)	21.0	19.0	6.0			9	
SP38	円	灰(7.5Y4/1)	17.0	11.0	4.0			9	
SP39	円	灰(7.5Y4/1)	16.0	16.0	13.0			9	
SP40	円	灰(7.5Y4/1)	18.0	14.0	6.0			9	
SP41	円	灰(7.5Y4/1)	21.0	18.0	7.0			9	
SP42	円	灰(7.5Y4/1)	15.0	14.0	3.0			9	
SP43	円	灰(7.5Y4/1)	23.0	23.0	12.0	←SK07	土師器片を含む	9	
SP44	不整円	灰(7.5Y4/1)	[58.0]	[15.0]	3.0	←SK07	土師器・瓦器片を含む	9	
SP45	楕円	灰(7.5Y4/1)	18.0	16.0	12.0		須恵器片を含む	9	
SP46	円	灰(7.5Y4/1)	37.0	30.0	13.0			9	
SP47	楕円	灰(7.5Y4/1)	23.0	13.0	5.0		瓦器片を含む	9	
SP48	円	灰(7.5Y4/1)	18.0	15.0	4.0			9	
SP49	楕円	灰(7.5Y4/1)	26.0	20.0	22.0		須恵器・土師器・瓦器片を含む	9	
SP50	楕円	灰(7.5Y4/1)	25.0	13.0	4.0			9	
SP51	半月	灰(7.5Y4/1)	16.0	10.0	9.0			9	
SP52	円	灰(7.5Y4/1)	44.0	30.0	10.0		土師器片を含む	9	
SP53	円	灰(7.5Y4/1)	28.0	22.0	15.0		土師器片を含む	9	
SP54	円	灰(7.5Y4/1)	22.0	20.0	10.0			9	
SP55	楕円	灰(7.5Y4/1)	36.0	27.0	14.0			9	
SP56	円	灰(7.5Y4/1)	17.0	16.0	5.0		土師器片を含む	9	
SP57	楕円	灰(7.5Y4/1)	30.0	21.0	6.0		土師器片を含む	9	

表4 柱穴一覧(2)

単位:cm (\*):復元値 [\*]:残存値 →\*\*:\*\*を切る,←\*\*:\*\*に切られる

遺構名	平面形	検出面埋土色調	長径	短径	深さ	重複関係	備考	図	図版
SP58	円	灰(7.5Y4/1)	22.0	20.0	18.0			9	
SP59	円	灰(7.5Y4/1)	17.0	17.0	15.0		土師器片を含む	9	
SP60	橢円	灰(7.5Y4/1)	28.0	20.0	8.0			9	
SP61	橢円	灰(7.5Y4/1)	22.0	16.0	5.0			9	
SP62	橢円	灰(7.5Y4/1)	28.0	20.0	8.0			9	
SP63	橢円	灰(7.5Y4/1)	23.0	20.0	15.0		土師器片を含む	9	
SP64	橢円	灰(7.5Y4/1)	36.0	32.0	27.0		土師器片・鉄製品を含む	9	
SP65	円	灰(7.5Y4/1)	33.0	20.0	5.0	←SP66	土師器・瓦器片を含む	9	
SP66	橢円	灰(7.5Y4/1)	70.0	48.0	8.0	→SP65	土師器片を含む	9	
SP67	橢円	灰(7.5Y4/1)	90.0	48.0	6.0	←SP68	瓦片を含む	9	
SP68	橢円	灰(7.5Y4/1)	45.0	42.0	10.0	→SP67		9	
SP69	橢円	灰(7.5Y4/1)	40.0	36.0	15.0			9	
SP70	橢円	灰(7.5Y4/1)	43.0	25.0	10.0		窯壁を含む	9	
SP71	円	灰(7.5Y4/1)	23.0	23.0	18.0		土師器片を含む	9	
SP72	円	灰(7.5Y4/1)	20.0	20.0	15.0			9	
SP73	円	灰黄褐(10YR4/2)	36.0	36.0	8.0			4	
SP74	円	灰黄褐(10YR4/2)	22.0	22.0	6.0			4	
SP75	円	灰黄褐(10YR4/2)	40.0	40.0	12.0		瓦器・瓦片を含む	4	
SP76	橢円	にぶい黄褐(10YR4/3)	55.0	40.0	9.0		土師器片を含む	4	
SP77	円	にぶい黄褐(10YR4/3)	17.0	16.0	6.0			4	
SP78	橢円	灰黄褐(10YR4/2)	16.0	8.0	5.0			4	
SP79	円	にぶい黄褐(10YR4/3)	20.0	20.0	6.0		瓦器片を含む	4	
SP80	橢円	にぶい黄褐(10YR4/3)	40.0	[30.0]	6.0			4	
SP81	円	暗灰黄(2.5Y4/2)	32.0	28.0	8.0		炭化物・土器片を含む	4	
SP82	円	暗灰黄(2.5Y4/2)	28.0	28.0	13.0			4	
SP83	円	にぶい黄褐(10YR4/3)	35.0	32.0	6.0			4	
SP84	不整円	暗灰黄(2.5Y4/2)	48.0	18.0	3.0		瓦片を含む	4	

## 第4章 中世の遺構と遺物

IV層下面およびV層下面で遺構面を確認し、それぞれ第1面・第2面とした。V層は調査区北東部にのみ遺存する堆積土であるため、第2面は調査区北東部でのみ確認される遺構面である。

### 第1節 第2面の遺構と遺物(図4)

第2面では、土坑3基・自然流路1条・柱穴12を検出した。地形は南西から北東へ向かって緩やかに傾斜し、検出面の標高は1.6～1.4mである。

#### 1 土坑

##### (1) SK15(図5)

**遺構** 調査区東部で検出した。検出面の標高は1.6mである。平面形は傾斜方向に主軸をとるやや不整形な楕円形を呈し、長径130cm、短径72cm、検出面からの深さ13.0cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底は比較的平坦である。埋土は暗灰黄色の粗砂混じり粘土で、炭化物が混じる。遺物は、土師器2点・弥生土器1点・窯壁1点が出土したが、いずれも小破片である。出土遺物が小破片であるため詳細な時期は不明であるが、周辺の状況から13世紀頃と考えられる。

##### (2) SK16(図5)

**遺構** 調査区東部で検出した。検出面の標高は1.6mである。遺構の南東側が調査区外へ続くが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。検出部の長径62cm、検出面からの深さ12.5cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底はほぼ平坦である。埋土は暗灰黄色の粗砂混じり粘土である。時期は周辺の状況から13世紀頃と考えられる。遺物は土師器3点・瓦器1点・瓦1点が出土し、このうち2点を図示した。

**遺物** 1は円盤高台の土師器杯で、底部の切り離しは回転糸切りである。2は平瓦である。凸面は縄目タタキのあとヘラミガキ、凹面は布目で一部にヘラケズリが施されている。側面はヘラ切りで、断面形が「コ」字形を呈する。

##### (3) SK17(図5)

**遺構** 調査区東部で検出した。検出面の標高は1.6mである。平面形は傾斜方向に主軸をとるやや不整形な楕円形を呈し、長径100cm、短径64cm、検出面からの深さ5.0cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底はほぼ平坦である。埋土は暗灰黄色の粗砂混じり粘土である。遺物は、瓦と鉄滓の小破片1点ずつが出土した。

#### 2 自然流路

##### (1) SR01(図6)

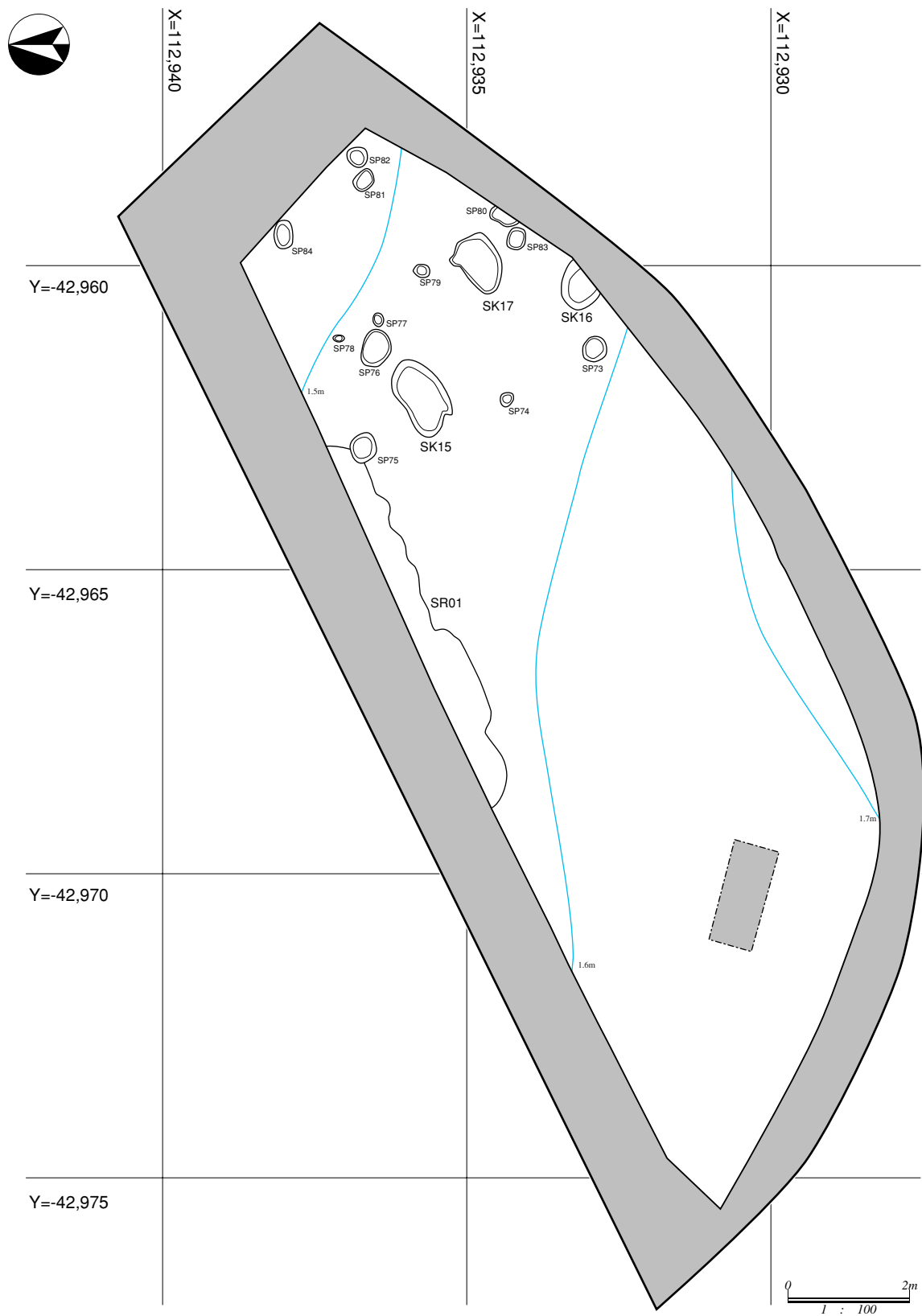


図4 中世(第2面)遺構配置

**遺構** 調査区北部で検出した。SP75に切られる。検出面の標高は1.5mである。河道の肩を検出したが、大半は調査区外であるため、幅や深さは不明である。等高線に沿って蛇行しながら南西から北東へ流走する。検出部の延長は約6.5mで、検出面からの深さ36.0cmを測る。埋土は6層に分層できる。最下層の6層は灰色を呈する砂混じり粘土で、遺物が含まれる。出土遺物は6世紀から13世紀にかけてと時期幅をもつが、出土状況から流路の最終埋積時期は13世紀初頭と考えられる。遺物は須恵器12点・黒色土器2点・土師器15点・瓦器2点・瓦9点・土師質土器4点・瓦質土器1点が出土し、このうち9点を図示した。

**遺物** 3～5は須恵器である。3は杯蓋である。形骸化した沈線が1条巡り、口縁部はわずかに外反して端部に内傾する段をもつ。天井部の約1/2に回転ヘラケズリを施す。4はハソウである。口縁部下端に沈線1条を巡らせ、端部に内傾する段をもつ。5は杯Bである。断面方形の高台を貼り付け、高台は内端面で接地する。6は黒色土器A類の椀である。体部は内湾し、口縁部がわずかに外反気味である。口縁端部は尖り気味で、底部には断面三角形の高台を貼り付ける。内外面ともミガキを施す。

7・8はいずれも土師器杯であるが、同一個体の可能性がある。胴部はわずかに内湾し、口縁端部は尖り気味である。底部の切り離しは回転糸切りである。9は和泉型の瓦器椀である。胴部は内湾し、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸く収める。内面には斜め方向の暗文が施され、

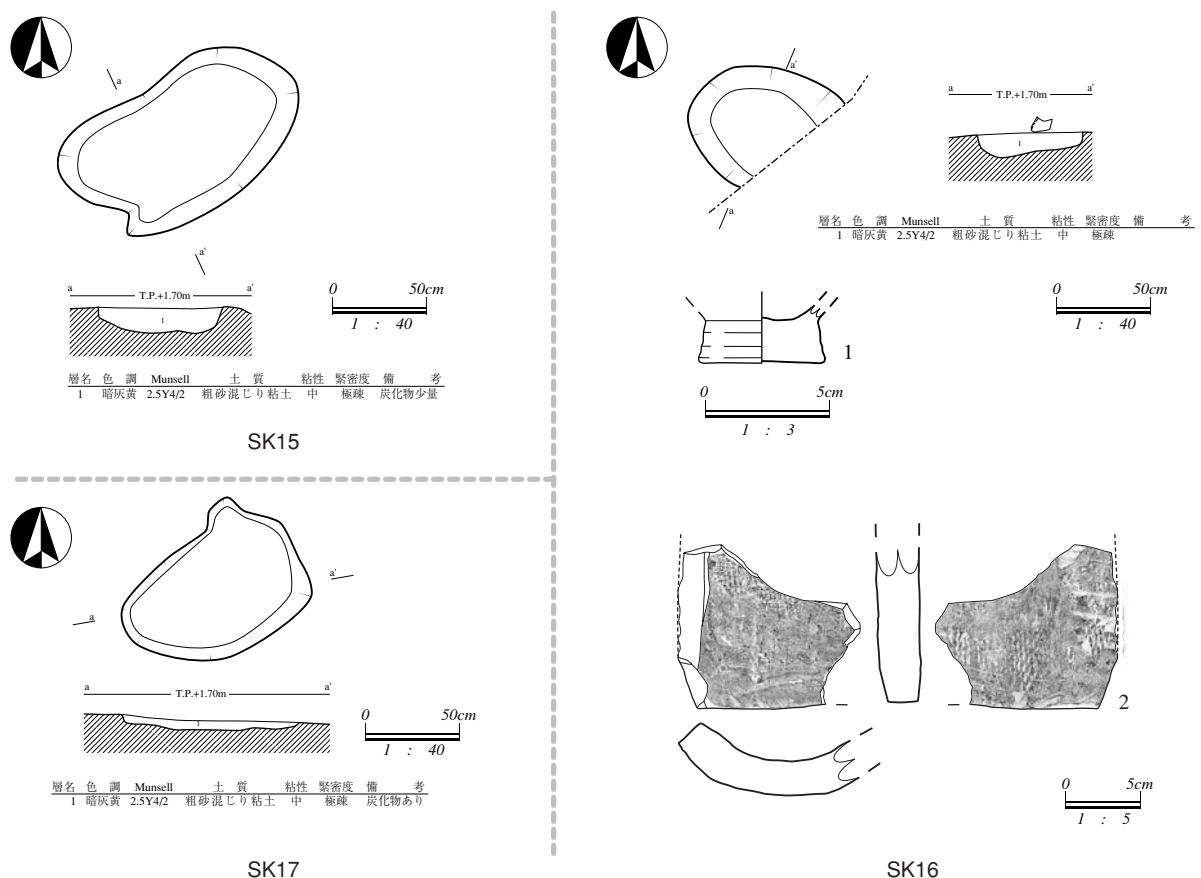
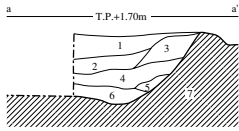
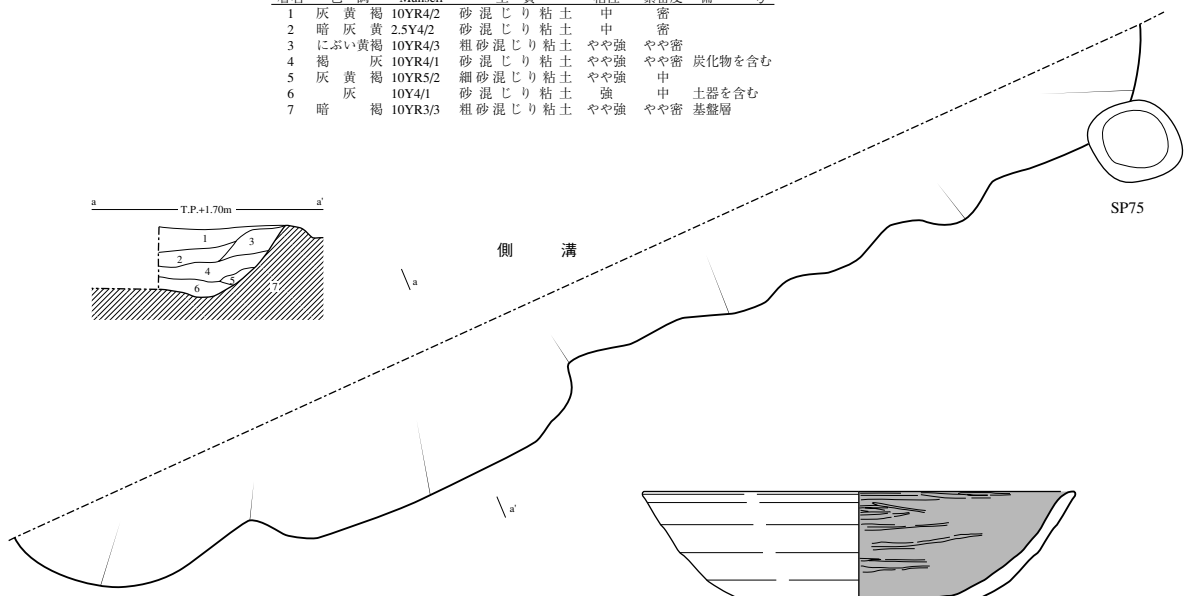


図5 遺構と遺物1(土坑1)



層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	灰黄褐	10YR4/2	砂混じり粘土	中	密	
2	暗灰黄	2.5Y4/2	砂混じり粘土	中	密	
3	にぶい黄褐	10YR4/3	粗砂混じり粘土	やや強	やや密	
4	褐灰	10YR4/1	砂混じり粘土	やや強	やや密	炭化物を含む
5	灰黄褐	10YR5/2	細砂混じり粘土	中	中	土器を含む
6	暗灰	10Y4/1	砂混じり粘土	強	密	
7	暗褐	10YR3/3	粗砂混じり粘土	やや強	やや密	基盤層



側溝

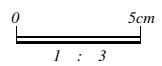
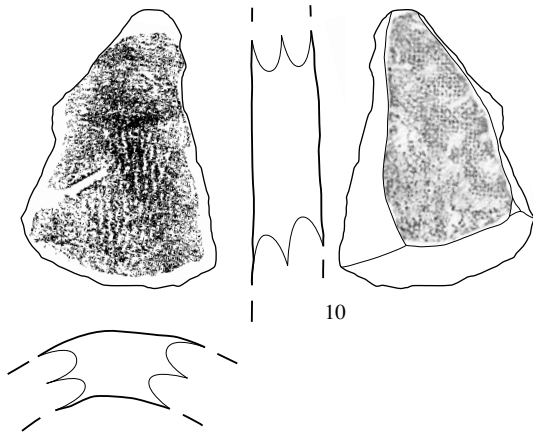
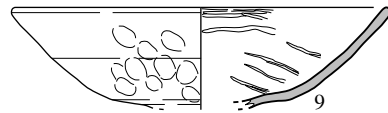
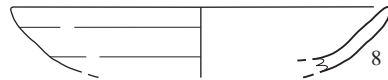
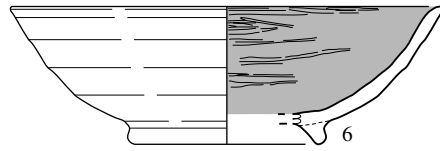
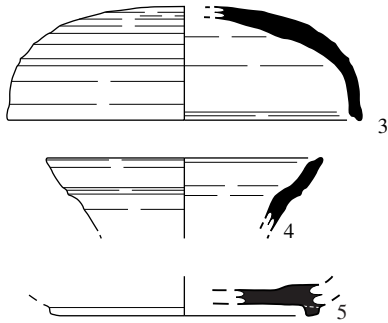


図6 遺構と遺物2(自然流路)



外面は指押さえによる凹凸が顕著である。10は丸瓦、11は平瓦である。ともに凸面は縄目のちヘラミガキ、凹面は布目で一部ヘラミガキを施す。

### 3 柱穴出土遺物(図7)

SP75から瓦器1点・瓦2点・SP76から土師器2点、SP79から瓦器1点、SP81から土師器1点・土師質土器1点・瓦2点、SP84から瓦2点が出土している。12はSP75の、13はSP79の出土遺物である。

遺物 12・13とも和泉型の瓦器碗である。12は胴部がわずかに内湾して口縁端部は丸みを帯びる。13の胴部は内湾気味で、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は尖り気味である。内面にミガキを施し、外面は指押さえによる凹凸が残る。

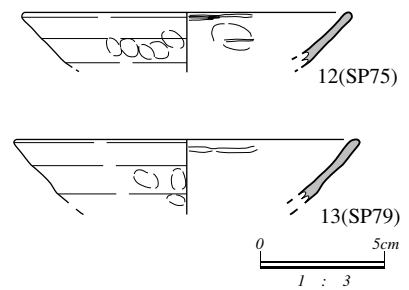


図7 柱穴出土遺物1

### 4 包含層出土遺物(図8)

第2面を覆うV層からは弥生土器・古式土師器・須恵器・土師器・瓦器・土師質土器・瓦質土

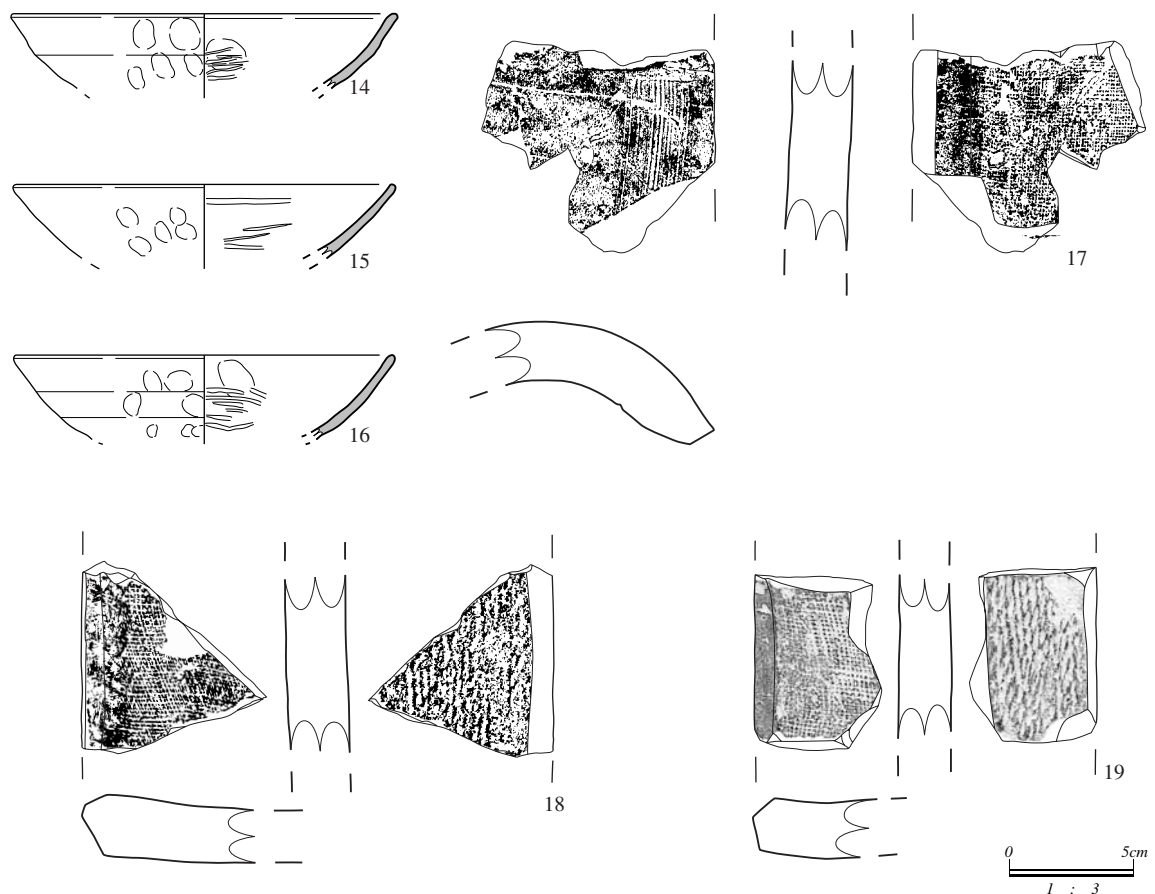


図8 V層出土遺物

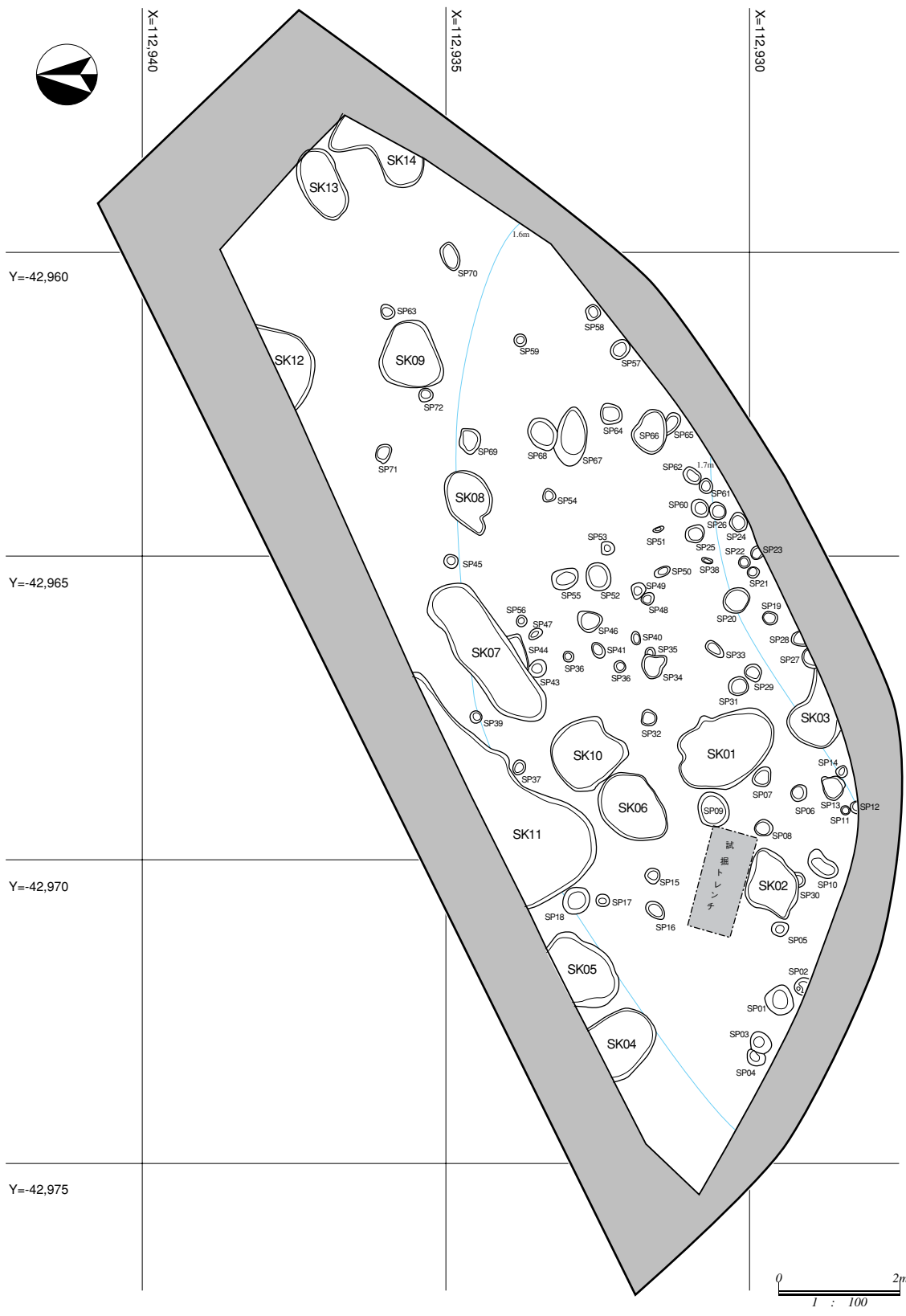


図9 中世(第1面)遺構配置

器・磁器・瓦・窯壁など601点が出土している。このうち残存状況の良好なものや特徴的なものを図示した。

**遺物** 14～16は和泉型の瓦器椀である。胴部は内湾し、口縁部がわずかに外反する。内面にミガキを施し、外面は指押さえによる凹凸が残る。

17は丸瓦、18・19は平瓦である。17は側面のヘラ切りを二度行い、断面が「く」字形を呈する。凹面は布目、凸面はナデを施す。18・19も側面のヘラ切りを二度行い、断面が「く」字形を呈する。凹面は布目、凸面は縄目である。

## 第2節 第1面の遺構と遺物(図9)

第1面では、土坑14基・柱穴72を検出した。地形は南から北へ向かって緩やかに傾斜し、検出面の標高1.7～1.5mである。

### 1 土坑

#### (1) SK01(図10)

**遺構** 調査区西部で検出した。検出面の標高は1.6mである。平面形は傾斜に沿って主軸をとるやや不整な楕円形を呈し、長径172cm、短径125cm、検出面からの深さ23.0cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底はほぼ平坦である。埋土は灰色の粗砂混じり粘土である。遺物は須恵器3点・土師器6点・瓦器1点・瓦1点が出土したが、いずれも小破片である。時期の詳細は不明であるが、周辺状況から13世紀頃と考えられる。

#### (2) SK02(図10)

**遺構** 調査区西部で検出した。検出面の標高は、1.6mである。平面形は隅丸方形を呈し、一辺90cm、検出面からの深さ15.0cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底は平坦である。埋土は灰色の粗砂混じり粘土である。遺物は須恵器1点・土師器1点が出土したが、いずれも小破片である。

#### (3) SK03(図10)

**遺構** 調査区南西隅で検出した。検出面の標高は1.7mである。遺構の半分以上が調査区外であり全容は不明であるが平面形は不整な隅丸長方形を呈するものと考えられる。傾斜に沿って主軸をとり、検出面からの深さ13.0cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底は比較的平坦である。埋土は灰色の粗砂混じり粘土である。遺物は弥生土器1点・土師器3点・瓦器1点・瓦2点が出土した。時期の詳細は不明であるが、周辺状況から13世紀頃と考えられる。

#### (4) SK04(図10)

**遺構** 調査区北西部で検出した。検出面の標高は1.5mである。遺構の一部が調査区外となるが、

楕円形を呈するものと考えられる。短径98.5cm、検出面からの深さ7.0cmを測る。壁面は緩やかに傾斜し、坑底は平坦である。埋土は灰色の粗砂混じり粘土である。時期は13世紀頃と考えられる。遺物は土師器2点・瓦質土器1点・銅銭1点が出土し、このうち2点を図示した。

遺物 20は瓦質土器の鍋である。口縁部は外傾し、口縁端部は外方へ肥厚して突出する。内面はハケ目を施し、外面には煤が付着する。21は「熙寧元寶」である。初鑄年は1068年(北宋)である。

#### (5) SK05(図11)

遺構 調査区北西部で検出した。検出面の標高は1.5mである。遺構の一部が調査区外であるが、平面形は長楕円形を呈するものと考えられる。長径136cm、検出面からの深さ16.0cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底は比較的平坦である。埋土は灰色の粗砂混じり粘土である。時期は13世紀頃と考えられる。遺物は須恵器1点・瓦1点が出土し、このうち1点を図示した。

遺物 22は東播系の鉢である。口縁部は直線的に外上方へのび、口縁端部は外傾面をなす。

#### (6) SK06(図11)

遺構 調査区西部で検出した。検出面の標高は1.6mである。平面形は楕円形を呈し、長径131cm、短径94cm、検出面からの深さ11.0cmを測る。壁面は緩やかに傾斜し、坑底は中央部がやや盛り上がる。埋土は灰色を呈する粗砂混じり粘土である。遺物は須恵器2点・土師器17点・土師質土器1点・瓦質土器1点・磁器1点・瓦4点が出土したが、いずれも小破片である。時期の詳細は不明であるが、13世紀頃と考えられる。

#### (7) SK07(図11)

遺構 調査区中央部で検出した。検出面の標高は1.6mである。平面形は長楕円形を呈し、長径268cm、短径86cm、検出面からの深さ13.0cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底は平坦である。埋土は灰色の粗砂混じり粘土である。時期は13世紀頃と考えられる。遺物は土師器18点・瓦器1点・瓦4点・石器1点が出土し、このうち1点を図示した。

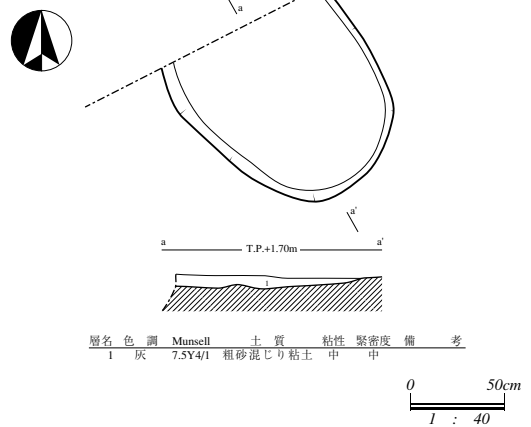
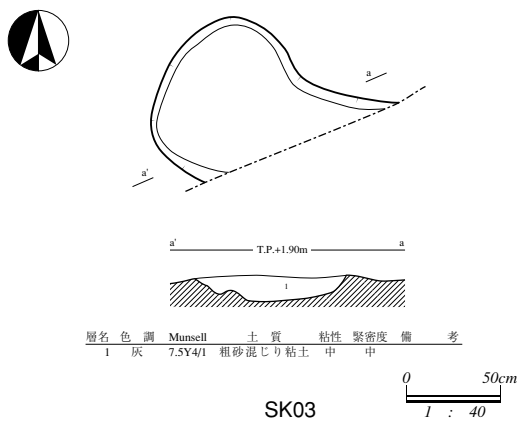
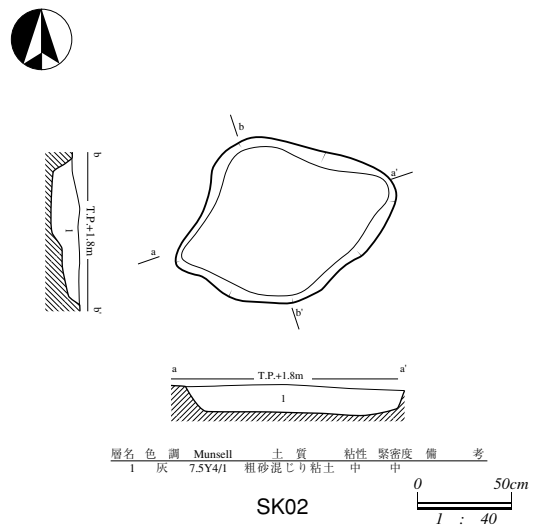
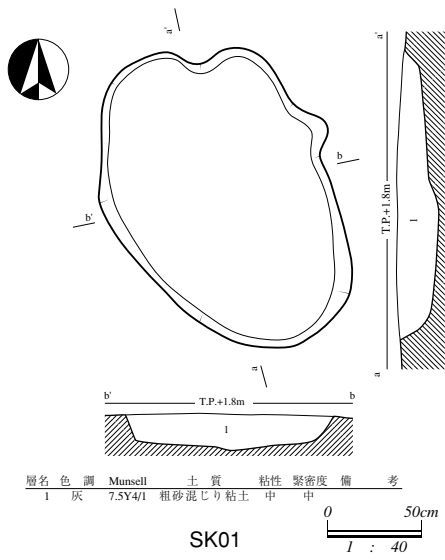
遺物 23は柱状片刃石斧の刃部付近の破片と考えられる。

#### (8) SK08(図11)

遺構 調査区中央部で検出した。検出面の標高は1.6mである。平面形は不整な楕円形を呈し、長径88cm、短径78cm、検出面からの深さ10.0cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底は平坦である。埋土は灰色の粗砂混じり粘土である。遺物は土師器8点・瓦器5点・土師質土器1点・磁器1点・瓦1点が出土したが、いずれも小破片である。時期の詳細は不明であるが、13世紀頃と考えられる。

#### (9) SK09(図12)

遺構 調査区東部で検出した。検出面の標高は1.5mである。平面形は隅丸長方形を呈し、長径



SK04

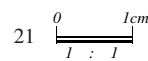
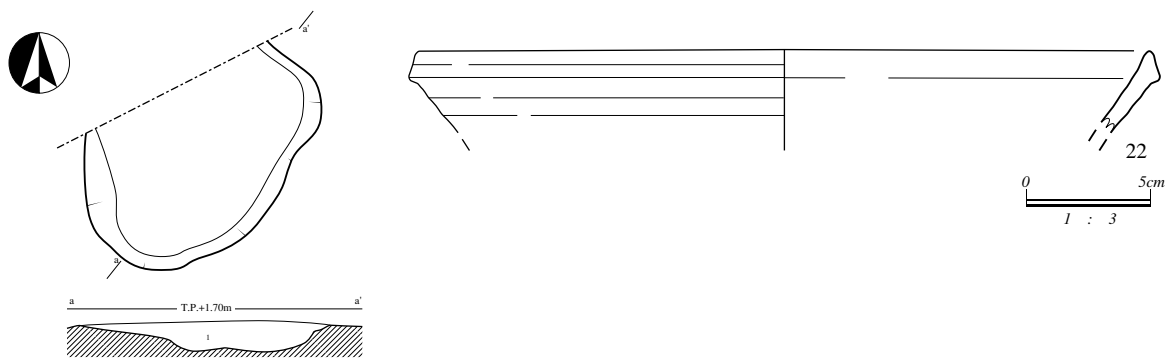
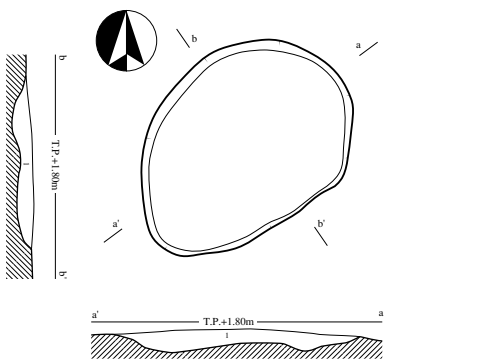
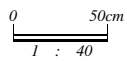


図10 遺構と遺物3(土坑2)



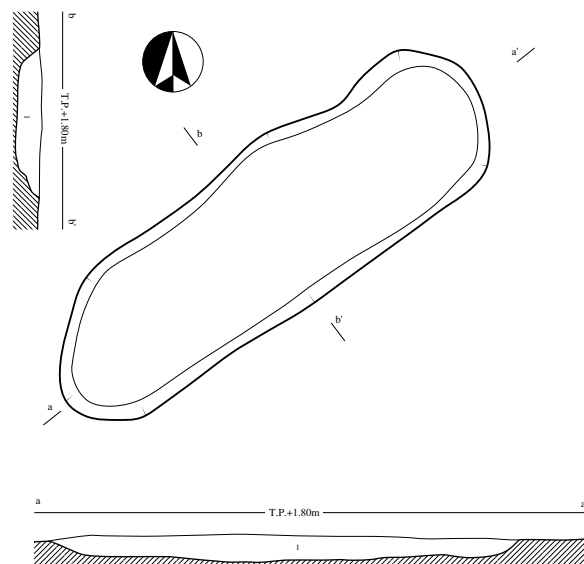
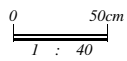
層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	灰	7.5Y4/1	粗砂混じり粘土	中	中	

SK05



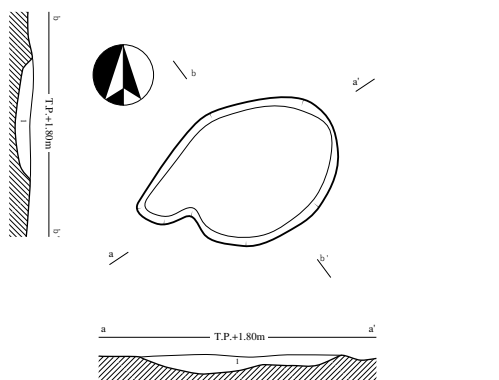
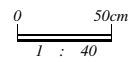
層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	灰	7.5Y4/1	粗砂混じり粘土	中	中	

SK06



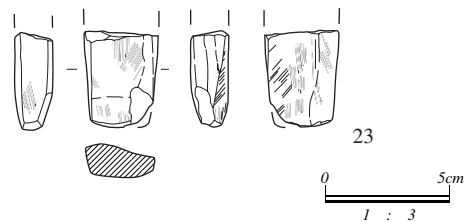
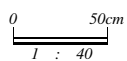
層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	灰	7.5Y4/1	粗砂混じり粘土	中	中	

SK07



層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	灰	7.5Y4/1	粗砂混じり粘土	中	中	

SK08



23

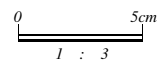


図11 遺構と遺物4(土坑3)

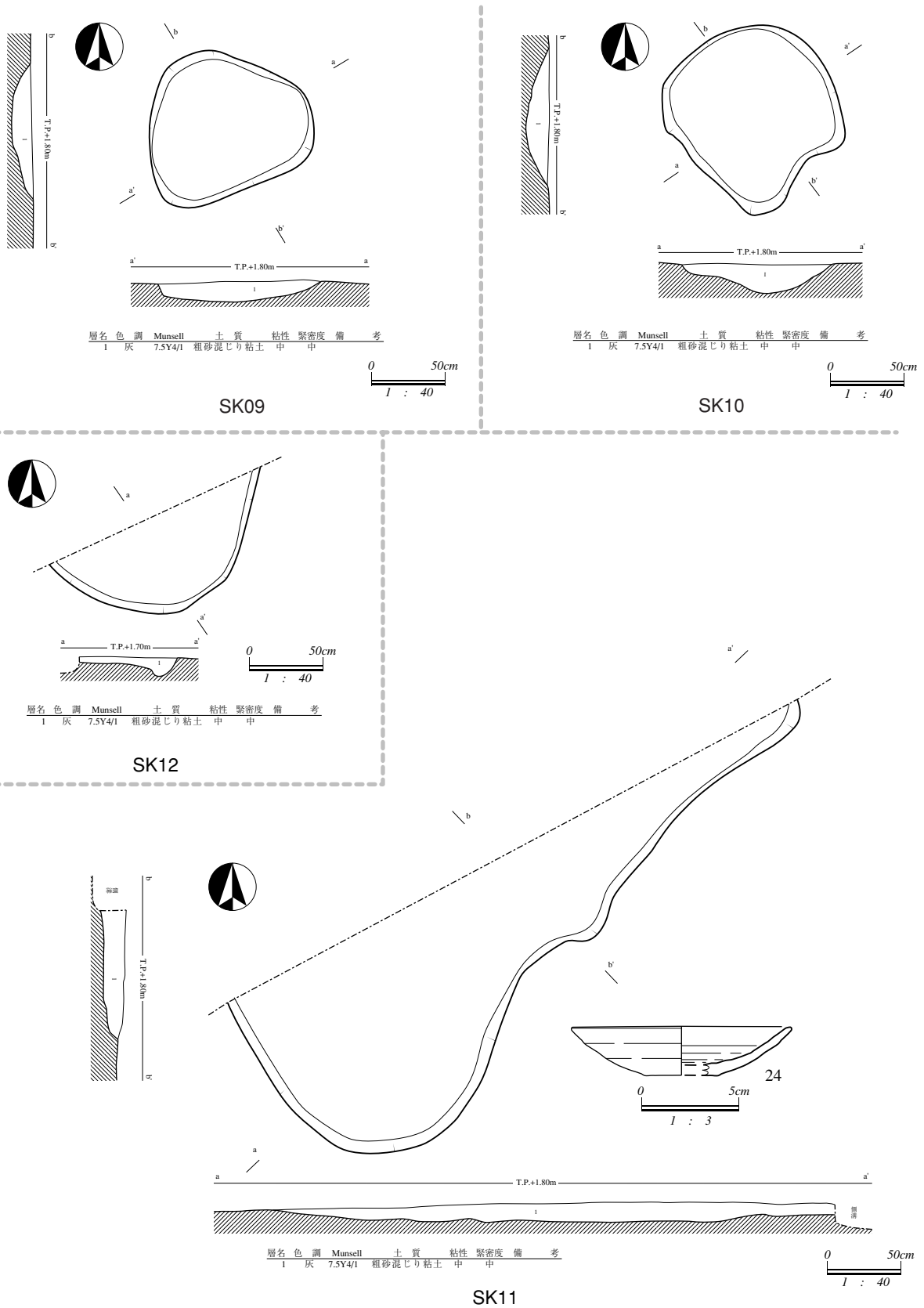


図12 遺構と遺物5(土坑4)

111cm、短径96cm、検出面からの深さ14.0cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底は平坦である。埋土は灰色の粗砂混じり粘土である。遺物は須恵器1点・土師器11点・瓦器1点・瓦1点・窯壁1点が出土したが、いずれも小破片である。時期の詳細は不明であるが、13世紀頃と考えられる。

(10) SK10(図12)

**遺構** 調査区中央部で検出した。検出面の標高は1.6mである。平面形は傾斜に沿って主軸をとるやや不整な隅丸長方形を呈し、長径111cm・短径109cm、検出面からの深さ19.0cmを測る。壁面は緩やかに傾斜し、坑底は丸く窪む。埋土は灰色の粗砂混じり粘土である。遺物は土師器6点が出土したが、いずれも小破片である。時期の詳細は不明であるが、13世紀頃と考えられる。

(11) SK11(図12)

**遺構** 調査区北西部で検出した。検出面の標高は1.6mである。遺構の半分以上が調査区外であるが、検出部は不整形である。検出部の長径430cm、検出面からの深さは13.5cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底は平坦である。埋土は灰色の粗砂混じり粘土である。時期は13世紀頃と考えられる。遺物は須恵器8点・土師器51点・古式土師器1点・瓦器12点・土師質土器3点・瓦質土器2点・瓦8点が出土し、このうち1点を図示した。

**遺物** 24は土師器皿である。底部の切り離しは静止糸切りで、内外面ともナデを施す。

(12) SK12(図12)

**遺構** 調査区北東隅で検出した。検出面の標高は1.6mである。遺構の半分以上が調査区外であるが、平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。傾斜に沿って主軸をとり、検出面からの深さ12.0cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底は平坦であるが一部が窪む。埋土は灰色の

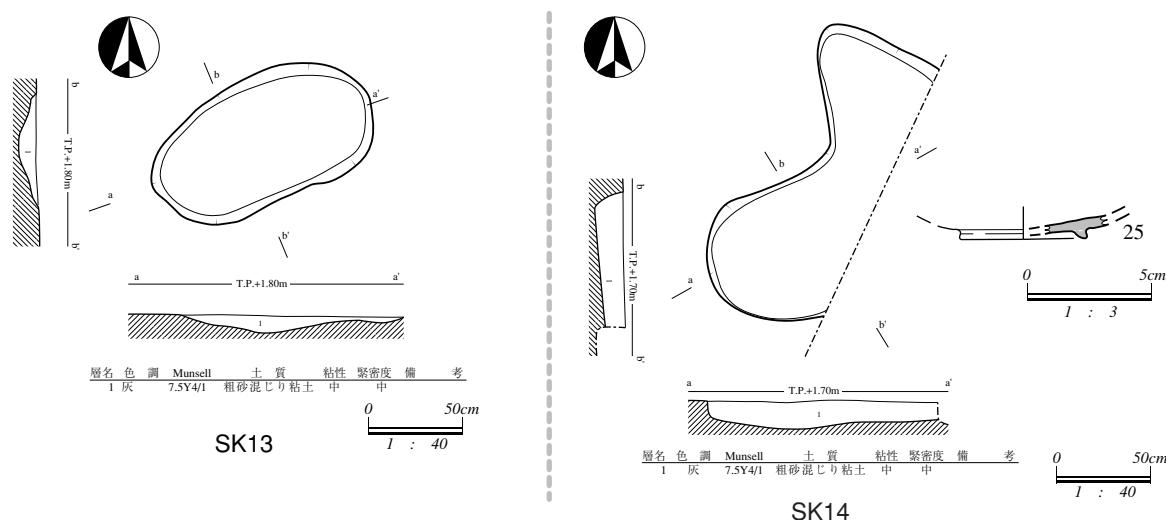


図13 遺構と遺物6(土坑5)



粗砂混じり粘土である。遺物は土師器4点・瓦2点が出土したが、いずれも小破片である。時期の詳細は不明であるが、13世紀頃と考えられる。

### (13) SK13(図13)

**遺構** 調査区東部で検出した。検出面の標高は1.5mである。平面形は長楕円形を呈し、長径120cm、短径65cm、検出面からの深さ9.0cmを測る。壁面は緩やかに傾斜し、坑底はレンズ状に窪む。埋土は灰色の粗砂混じり粘土である。遺物は須恵器2点・土師器5点・瓦4点であるが、いずれも小破片である。時期の詳細は不明であるが、13世紀頃と考えられる。

### (14) SK14(図13)

**遺構** 調査区東隅で検出した。検出面の標高は1.5mである。遺構の半分以上が調査区外であるが、検出部は不整形である。検出面からの深さ15.0cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底は平坦である。埋土は灰色の粗砂混じり粘土である。時期の詳細は不明であるが、13世紀頃と考えられる。遺物は須恵器6点・土師器19点・瓦器1点、土師質土器2点・瓦質土器1点・瓦4点が出土し、このうち1点を図示した。

**遺物** 25は和泉型の瓦器椀である。底部に高台を貼り付ける。

## 2 柱穴出土遺物(図14)

SP01をはじめとして、29のピットから弥生土器1点・須恵器5点・土師器33点・瓦器7点・瓦4点・窯壁1点・石製品1点・鉄製品1点が出土しているが、いずれも小破片である。このうちSP13から出土した比較的残存状態が良好な砥石を図示した。

**遺物** 26は流紋岩製の砥石である。欠損部が多いが、全体形は長方形を呈すると考えられる。全面を研面とするが、特に主面の摩耗が著しい。

## 3 包含層出土遺物(図15)

IV層からは弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・土師質土器・瓦質土器・陶磁器・瓦・窯壁・鉄製品など755点が出土している。このうち残存状況の良好なものや特徴的なものを図示した。

27は須恵器の杯身である。立ち上がりは内傾し、端部を丸く収める。内外面とも回転ナデを施す。28～30は土師器杯である。28は円盤高台をもつ。28・29の底部の切り離しは回転糸切りである。31～33は和泉型の瓦器椀で、34は瓦器杯である。31の胴部は内湾し、口縁部上端付近でわずかに外反する。33・34は内面に暗文を施す。

35は白磁碗IV類である。胴部は内湾気味に立ち上がり、口縁は玉縁状を呈する。貫入が看取でき、釉が発泡して外面に無数の小孔が認められる。

36は有段式の丸瓦である。凸面は長軸方向にナデ・ミガキを施す。

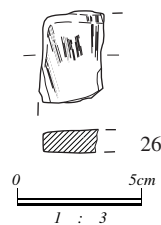


図14 柱穴出土遺物2

### 第3節 その他の遺物(図15)

側溝・攪乱などからの出土で層位を特定できない遺物は、須恵器26点・黒色土器1点・土師器92点・瓦器18点・土師質土器16点・瓦質土器3点・陶磁器3点・土師質土器23点・鉄製品1点・瓦40点・窯壁35点である。多くは小破片であるが、残存状況の良好な備前焼の播鉢を図示した。37は口縁部が上下に肥厚し口縁端部は外傾面をなす。

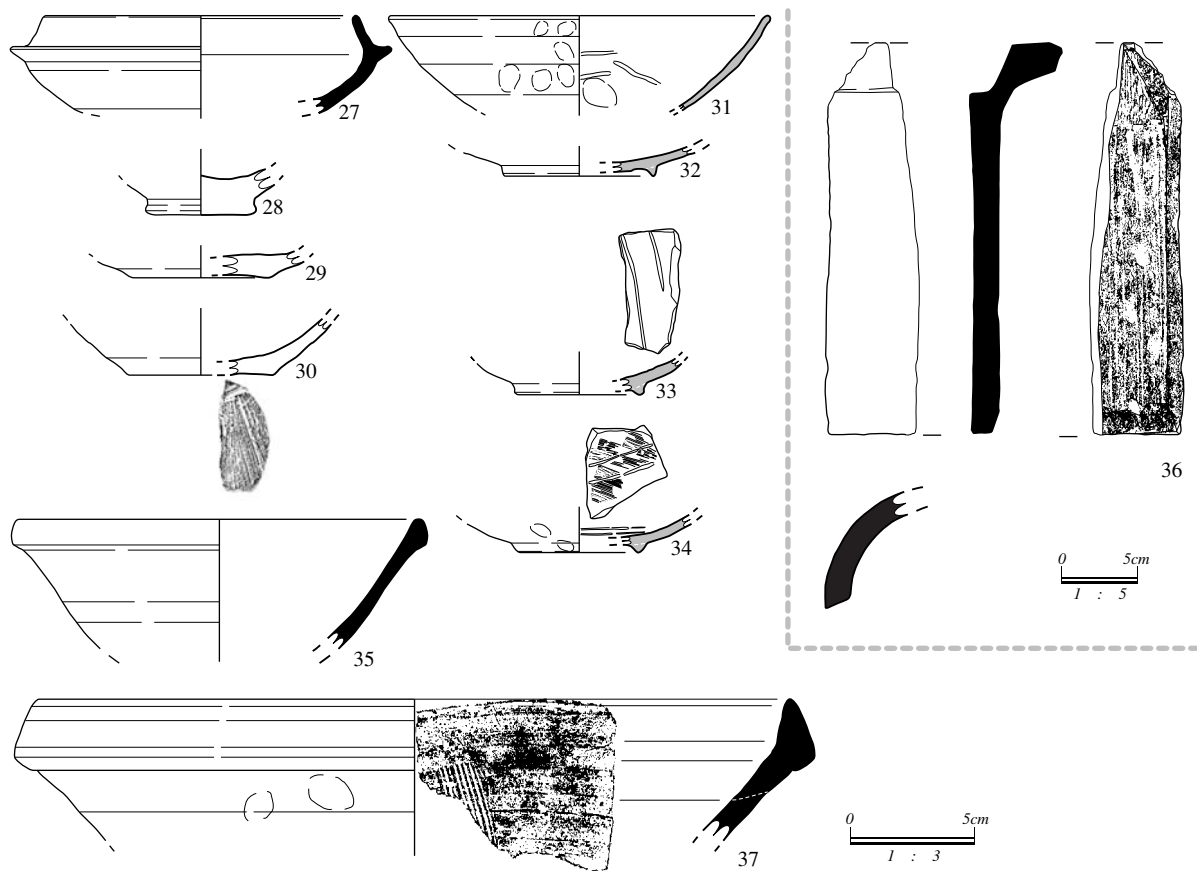


図15 IV層出土および層位不明遺物

表5 掲載遺物一覧

番号	種別	器種	出土情報	法量	外面色調	調整	備考	図	図版
1	土師器	杯	SK16	H[2.3],LR5.0	7.5YR8/3	回転糸切り		5	
2	瓦	平瓦	SK16	T2.2~2.6	2.5Y7/1	o:布目 i:縄目		5	6
3	須恵器	杯蓋	SR01	TR(14.0)	5B6/1	回転ヘラケズリ		6	6
4	須恵器	ハソウ	SR01	TR(11.0)	10Y4/1			6	6
5	須恵器	杯	SR01	LR(8.8)	2.5Y8/1			6	
6	黒色土	椀	SR01	H5.5,TR17.0,LR(7.2)	2.5Y2/1	o:ミガキ i:ミガキ		6	6
7	土師器	杯	SR01	LR(10.6)	N6/	回転糸切り		6	
8	土師器	杯	SR01	TR(15.0)	2.5Y8/2			6	6
9	瓦器	椀	SR01	TR(15.0)	N2/	o: i:ミガキ	暗文 和泉型	6	6
10	瓦	丸瓦	SR01	T2.4~2.7	5Y8/1	o:縄目 i:布目		6	6
11	瓦	平瓦	SR01	T3.1~3.2	2.5Y8/1	o:布目 i:縄目		6	6
12	瓦器	椀	SP75	TR(13.0)	N4/	o: i:ミガキ	和泉型	7	
13	瓦器	椀	SP79	TR(13.4)	2.5Y7/1	o: i:ミガキ	和泉型	7	
14	瓦器	椀	V層	TR(15.2)	N6/	o: i:ミガキ	和泉型	8	6
15	瓦器	椀	V層	TR(15.0)	N5/	o: i:ミガキ	和泉型	8	6
16	瓦器	椀	V層	TR(15.0)	N6/	o: i:ミガキ	和泉型	8	6
17	瓦	丸瓦	V層	T2.4	2.5YR6/2	o:ナデ i:布目		8	6
18	瓦	平瓦	V層	T2.1~2.6	10YR6/1	o:布目 i:縄目		8	6
19	瓦	平瓦	V層	T2.0~2.2	2.5Y8/1	o:布目 i:縄目		8	6
20	瓦質	土鍋	SK04	TR(36.0)	5Y3/1	o: i:ハケ		10	6
21	銅製品	銭貨	SK04	R2.5,HR0.8,T0.12,g2.07			熙寧元寶	10	6
22	須恵器	鉢	SK05	TR(29.0)	N5/	回転ナデ	東播系	11	6
23	石器	柱状片刃石斧	SK07	L[3.8],W[2.9],T1.4	10Y7/1			11	6
24	土師器	椀	SK11	TR(11.1),LR(3.8),H2.4	7.5YR8/3	回転ナデ,静止糸切り		12	6
25	瓦器	椀	SK14	LR5.0	N7/		和泉型	13	
26	石製品	砥石	SP13	L[2.5],W[2.1],T0.9	N6/		流紋岩	14	6
27	須恵器	杯身	IV層	TR(12.2)	N7/	回転ナデ		15	6
28	土師器	杯	IV層	LR(4.4)	10YR7/3	回転糸切り		15	
29	土師器	杯	IV層	LR(5.6)	7.5YR7/4	回転糸切り		15	
30	土師器	杯	IV層	LR(5.8)	10YR8/2	板状押圧痕		15	6
31	瓦器	椀	IV層	TR(15.0)	5Y6/1	o: i:ミガキ	和泉型	15	6
32	瓦器	椀	IV層	LR(6.0)	10YR6/3		和泉型	15	
33	瓦器	椀	IV層	LR(5.0)	10Y7/1	o: i:ミガキ	暗文 和泉型	15	
34	瓦器	杯	IV層	LR(4.7)	N5/	o: i:ミガキ	暗文	15	
35	磁器	白磁碗	IV層	TR(16.0)	5Y7/1	回転ヘラケズリ	IV類	15	6
36	瓦	丸瓦	IV層	T1.3~2.7	N3/	o:ナデ,ミガキ i:		15	7
37	陶器	備前焼播鉢	トレンチ	TR(30.0)	10YR4/1	o: i:ハケ	IV類	15	6

表6 出土遺物一覽(1)

時期	出土情報	種別	部位	器種	区分	点数	掲載番号
中世1	SK01	須惠器	口縁部	杯	B	1	
		土師器	胴部	壺・甕	C	2	
		土師器	胴部	杯・皿類	C	6	
		瓦	胴部	皿・椀類	C	1	
	SK02	土師器	底	杯・皿類	B	1	
		須惠器	胴部	壺・甕	C	1	
	SK03	土師器	底	杯・皿類	B	1	
		土師器	胴部	杯・皿類	C	2	
		弥生土器	胴部	不明	C	1	
		瓦	胴部	皿・椀類	C	1	
SK04	土師器	底	杯・皿類	C	1		
	土師器	胴部	杯・皿類	C	1		
	瓦	口縁部	土	A	1	20	
	銅製品	口縁部	銭	A	1	21	
SK05	須惠器	口縁部	鉢	A	1	22	
	土師器	胴部	瓦	C	1		
SK06	土師器	口縁部	杯・皿類	B	1		
	土師器	底	杯・皿類	B	2		
	土師器	胴部	杯・皿類	C	14		
	須惠器	胴部	甕	C	2		
	土師器	胴部	土鍋・釜類	C	1		
	瓦質土器	胴部	土鍋・釜類	C	1		
	磁器	胴部	白磁碗	C	1		
	土製品	胴部	瓦	C	4		
	SK07	土師器	口縁部	杯・皿類	B	1	
		土師器	底	杯・皿類	B	2	
土師器		胴部	杯・皿類	C	15		
瓦		胴部	杯・皿類	C	1		
SK08	土師器	胴部	瓦	C	4		
	石	柱状片刃石斧		A	1	23	
	土師器	口縁部	杯・皿類	B	2		
	土師器	底	杯・皿類	B	1		
SK09	瓦	器口縁部	皿・椀類	C	5		
	土師器	胴部	皿・椀類	C	4		
	土師器	胴部	皿・椀類	C	4		
	土師器	胴部	土鍋・釜類	C	1		
	磁器	胴部	白磁碗	C	1		
	土製品	胴部	瓦	C	1		
	土師器	胴部	杯・皿類	C	11		
	須惠器	胴部	壺・甕	C	1		
	瓦	器口縁部	皿・椀類	C	1		
	土製品	胴部	瓦	C	1		
SK10	不明	不明	窯壁	C	1		
	土師器	胴部	杯・皿類	C	6		
SK11	土師器	半完形	椀	A	1	24	
	土師器	口縁部	杯・皿類	B	9		
	土師器	底	杯・皿類	B	2		
	土師器	胴部	杯・皿類	C	40		
	須惠器	口縁部	杯身	B	1		
	土師器	胴部	杯身	C	7		
	古式土師器	口縁部	壺	B	1		
	瓦	器口縁部	皿・椀類	B	4		
	土師器	底	皿・椀類	B	1		
	土師器	胴部	皿・椀類	C	4		
SK12	土師器	口縁部	土鍋・釜類	C	3		
	瓦質土器	口縁部	土鍋・釜類	B	2		
	土製品	胴部	瓦	C	8		
	不明	不明	窯壁	C	1		
	土師器	底	杯・皿類	B	1		
	土師器	胴部	杯・皿類	C	3		
	土製品	胴部	瓦	C	2		
	土師器	胴部	杯・皿類	C	5		
	須惠器	胴部	不明	C	2		
	土師器	胴部	瓦	C	4		
SK13	土師器	底	杯・皿類	B	3		
	土師器	胴部	杯・皿類	C	16		
	須惠器	胴部	不明	C	6		
	土師器	口縁部	土鍋・釜類	B	1		
SK14	土師器	胴部	土鍋・釜類	C	1		
	瓦	器底	椀	A	1	25	
	瓦質土器	脚	土鍋・釜類	C	1		
	土製品	胴部	瓦	C	4		
SP01	土師器	胴部	杯・皿類	C	1		
SP02	瓦	器	杯・皿類	B	1		
SP07	土製品		瓦	C	1		
SP08	須惠器	胴部	甕	B	1		
	土師器	口縁部	杯・皿類	B	1		
		胴部	杯・皿類	C	3		

表7 出土遺物一覽(2)

時期	出土情報	種別	部位	器種	区分	点数	掲載番号	
中世1	SP08	須惠器	胴部	壺・甕	B	1		
	SP09	土師器	胴部	杯・皿類	B	1		
	SP13	土師器	胴部	杯・皿類	C	1		
		石器		砥石	A	1	26	
	SP18	土師器	胴部	杯・皿類	C	2		
		土製品		瓦	C	1		
	SP23	瓦器	胴部	杯・皿類	C	1		
	SP24	須惠器	口縁部	壺・甕	C	1		
	SP31	弥生土器	胴部	壺	B	1		
	土師器	口縁部	杯・皿類	B	1			
SP32	瓦器	胴部	皿・椀類	B	1			
SP34	土師器	胴部	杯・皿類	C	1			
SP43	土師器	胴部	杯・皿類	C	1			
SP44	瓦器	胴部	皿・椀類	B	1			
土師器	胴部	杯・皿類	C	2				
SP45	須惠器	胴部	甕	B	1			
SP47	瓦器	底	椀	B	1			
IV層	SP49	土師器	口縁部	杯・皿類	B	2		
	土師器	胴部	杯・皿類	C	1			
	須惠器	胴部	杯身	B	1			
	瓦器	胴部	皿・椀類	B	1			
	SP52	土師器	口縁部	杯・皿類	B	1		
	SP53	土師器	胴部	杯・皿類	C	1		
	SP56	土師器	胴部	杯・皿類	C	1		
	SP57	土師器	胴部	杯・皿類	C	1		
	SP59	土師器	胴部	杯・皿類	C	1		
	SP63	土師器	胴部	杯・皿類	C	1		
IV層	SP64	土師器	胴部	杯・皿類	B	1		
	土師器	胴部	杯・皿類	C	5			
	鉄製品	不明	明鉄片	C	1			
	土師器	胴部	杯・皿類	B	1			
	土師器	胴部	杯・皿類	C	1			
	瓦器	胴部	皿・椀類	B	1			
	SP66	土師器	口縁部	杯・皿類	B	1		
	SP67	土製品		瓦	C	2		
	SP70	不明	不明	窯壁	C	1		
	SP71	土師器	胴部	杯・皿類	C	1		
IV層	弥生土器	口縁部	壺・甕	B	2			
	土師器	胴部	不明	C	2			
	土師器	口縁部	杯・皿類	B	9			
	底	部	杯・皿類	A	3	28~30		
	土師器	胴部	杯・皿類	B	15			
	土師器	胴部	杯・皿類	C	228			
	須惠器	半完形	杯身	A	1	27		
	土師器	口縁部	蓋杯	B	16			
	土師器	底	部	蓋杯	B	7		
	土師器	胴部	壺・甕	C	70			
IV層	瓦器	口縁部	椀	A	1	31		
	土師器	胴部	皿・椀類	B	56			
	土師器	底	部	椀	A	2	32,33	
	土師器	底	部	杯	A	1	34	
	土師器	胴部	皿・椀類	B	11			
	土師器	胴部	皿・椀類	C	32			
	土師質	口縁部	土鍋・釜類	B	1			
	土師器	胴部	土鍋・釜類	C	102			
	瓦質土器	口縁部	土鍋・釜類	B	2			
	土師器	胴部	土鍋・釜類	C	3			
IV層	陶器	口縁部	椀	B	2			
	土師器	胴部	不明	C	1			
	磁器	口縁部	白磁碗	A	1	35		
	土師器	胴部	不明	C	1			
	土製品		丸瓦	A	1	36		
	土製品		平瓦	B	1			
	土製品		瓦	C	145			
	鉄製品	胴部	鉄釘	B	1			
	鉄製品	不明	明鉄片	C	2			
	その他		窯壁	C	36			
中世2	SK15	土師器	口縁部	杯・皿類	B	1		
	土師器	胴部	杯・皿類	C	1			
	弥生土器	胴部	不明	C	1			
	その他		窯壁	C	1			
中世2	SK16	土師器	底	部	杯	A	1	1
	土師器	胴部	杯・皿類	B	1			
	土師器	胴部	杯・皿類	C	1			
	瓦	平瓦	A	1	2			
中世2	SK17	瓦器	胴部	皿・椀類	C	1		
	土製品	胴部	瓦	C	1			
鉄製品	不明	明鉄滓	C	1				
SP75	瓦器	口縁部	椀	A	1	12		
土製品	胴部	瓦	C	2				

表8 出土遺物一覽(3)

時期	出土情報	種別	部位	器種	区分	点数	掲載番号	
中世2	SP76	土師器	胴部	杯・皿類	C	2		
	SP79	瓦	器口縁部	椀	A	1	13	
	SP81	土師器	胴部	杯・皿類	C	1		
		土師質	胴部	土鍋・釜類	C	1		
		土製品	胴部	瓦	C	2		
	SP84	土製品	胴部	瓦	C	2		
		土師器	器口縁部	杯	A	1	8	
	SR01			底部	杯	A	1	7
					杯・皿類	B	1	
				胴部	杯・皿類	B	1	
						C	11	
		須恵器	半完形	器口縁部	杯蓋	A	1	3
					ハソウ	A	1	4
			胴部	蓋杯	B	1		
				蓋杯	B	2		
				不明	C	6		
		底部		杯	A	1	5	
				椀	A	1	6	
	黑色土器	半完形	器口縁部	椀	B	1		
				椀	A	1	9	
	瓦	器口縁部		椀	C	1		
				皿・椀類	C	4		
		土師質	胴部	土鍋・釜類	C	1		
				平瓦	A	2	10,11	
	土製品			C	7			
	V層	土師器	器口縁部	杯・皿類	B	10		
				底部	杯・皿類	B	20	
				胴部	杯・皿類	C	180	
		古式土師器	器口縁部	壺	B	1		
				椀	A	3	14~16	
		瓦	器口縁部	皿・椀類	B	1		
				皿・椀類	C	68		
土師質		器口縁部	土鍋・釜類	B	1			
			土鍋・釜類	C	42			
弥生土器		胴部	不明	C	4			
須恵器		胴部	不明	C	40			
瓦質土器		胴部	土鍋・釜類	C	3			
磁器		器口縁部	白磁	C	1			
			丸瓦	A	1	17		
			平瓦	A	2	18,19		
不須恵器		器口縁部	窯壁	C	122			
			杯身	C	1			
瓦		器底部	杯身	C	2			
			壺・甕	C	15			
土師器		器口縁部	高杯	C	1			
	皿・椀類		C	1				
土師質	器口縁部	皿・椀類	C	1				
		杯・皿類	C	2				
土師質	器口縁部	杯・皿類	C	15				
		土鍋・釜類	C	1				
瓦質土器	器口縁部	土鍋・釜類	C	3				
		土鍋・釜類	C	12				
黑色土器	器口縁部	土鍋・釜類	C	2				
		土鍋・釜類	C	1				
陶製品	器口縁部	椀	C	1				
		不明	C	1				
土製品	器口縁部	瓦	C	40				
		瓦	C	40				
層位不明	土師器	器口縁部	杯・皿類	C	73			
			不明	C	7			
	須恵器	器口縁部	不明	C	7			
			皿・椀類	C	16			
	土師質	器口縁部	土鍋・釜類	C	7			
			不明	C	1			
	磁器	器口縁部	不明	C	1			
鉄製品	器口縁部	不明	C	1				
不明	器口縁部	不明	C	35				
トレンチ	陶器	器口縁部	備前焼掃鉢	A	1	37		



## 第5章 まとめ

今回の調査では、中世の遺構を検出した。調査では部分的に2面の検出面を確認したが、両者に明確な時期差はない。出土した遺物は13世紀前後のものが最も多いが、弥生時代や古墳時代、古代の遺物も少量ながら出土している。遺構ではごく浅い土坑や柱穴が多数検出されたが、明確な建物配置などは不明である。遺構は調査区全域に分布しているが、どちらかと言えば南東側に多く、集落の本体は調査区の南東方向に求められる。本調査区の南東数10mには郷桜井八反地遺跡が存在している。郷桜井八反地遺跡では多数の土坑・柱穴のほかに区画溝や井戸も検出され、13世紀を中心とする多量の遺物が出土している。中世以外にも弥生土器や須恵器、瓦なども出土しており、遺構密度や遺物量に相違があるものの、時期あるいは遺跡内容の点で、本調査区の状況によく似ている。したがって、本調査区は郷桜井八反地遺跡に存在した中世集落の縁辺部にあたるもので、本来一連の集落であったと考えるのが妥当である。

本調査区は国分尼寺に近接、あるいはその寺域に含まれる可能性が高いが、国分尼寺に直接関係するような遺構は存在していなかった。遺物では中世の瓦に混じって胎土が白色を呈する軟質の瓦が出土していて、これらの瓦は国分尼寺に由来するものと考えられる。

今後は周辺の資料の蓄積を待って、国分尼寺の実体と律令制の崩壊がもたらした地域社会の変容の実相を解明してゆく必要がある。(三好)

### 参考文献

- 八木武弘ほか 1988『桜井中学校発掘調査報告書』今治市教育委員会  
田坂嘉則ほか 1994『郷桜井八反地遺跡』今治市教育委員会





四 版

## 凡 例

1. 遺物写真の縮率は、特に指定のないものについては約1/3である。
2. 遺構写真は鎌土が、遺物写真は西川が撮影した。

調査前の遺跡近景(南西より)



調査前の遺跡近景(南西より)



南壁土層堆積状況(北より)



基本層序(北より)







SK15(半截)



SK16(半截)



SK17(半截)

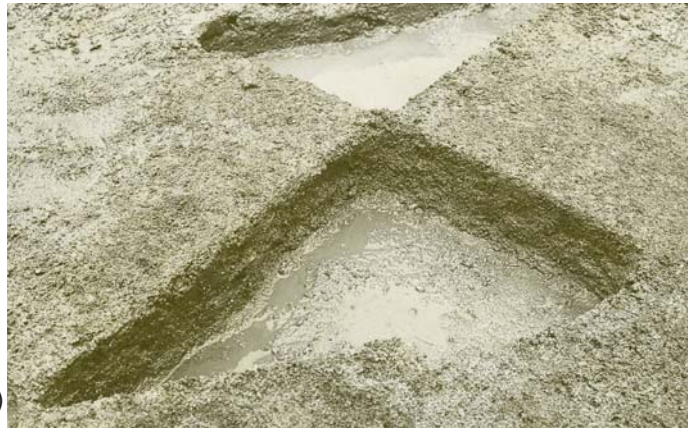


SR01

中世第2面完掘状況(北東より)



SK02(半截)



SK03



SK04







SK05



SK07



SK08(半截)



SK11

SK12



SK13(半截)



SK14(半截)



中世第1面完掘状況(北東より)













## 報告書抄録

ふりがな	ごうさくらいほりいせき							
書名	郷桜井堀遺跡							
副書名	一般県道桜井山路線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 1							
巻次								
シリーズ名	埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第136集							
編著者名	三好一史 鎌土奈々 西川真美							
編集機関	財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒791-8025 愛媛県松山市衣山四丁目68-1 TEL (089) 911-0502							
発行年月日	西暦 2006年 9月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ごうさくらいほりいせき 郷桜井堀遺跡	えひめけんいまぼりし 愛媛県今治市 ごうさくらい 郷桜井1丁目6-11,12	38202		34°00'52"	133°02'14"	20030714 ) 20030808	170	県道桜井山 路線整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
郷桜井堀遺跡	散布地	中世	土坑・自然流路	土師器・瓦器・須恵器 瓦・土師質土器・銭貨 陶磁器・黒色土器・石 器		国分尼寺に由来すると 考えられる瓦が出土し た。		
要約	国分尼寺の近接地に立地する中世の集落。近隣の郷桜井八反地遺跡の集落域縁辺部と考えられる。未だ詳細が不明な国分尼寺の実体と、その凋落の実相を解明する一資料と評価できる。							



埋蔵文化財発掘調査報告書 第136集

郷 桜 井 堀 遺 跡  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成18年9月

編集・発行 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター  
愛媛県松山市衣山四丁目68-1  
TEL (089) 911-0502

印刷 岡田印刷株式会社











